
COBALT-SERIES
前田珠子
聖石の使徒
狩人の爪
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

狩人の爪

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

狩人の爪

前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
狩人の爪

狩人の爪……7

あとがき……192

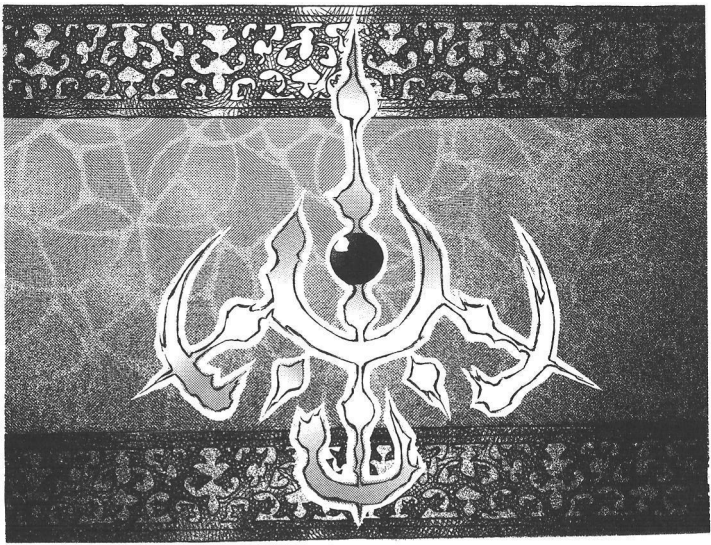

伽羅
黒珊瑚を抱いて生まれた聖石の子供。
セイタマール
血赤珊瑚を抱いて生まれた聖石の使徒。

聖石の使徒■登場人物紹介



イラスト／山本鳥尾

狩人の爪



プロローグ

緋芭大陸中でも、第一位と見なされるアスカニーリ神殿――芭蕉国の王都にある大神殿の奥宮で、緊張に満ちたやりとりが繰り広げられていた。

その当事者のひとりは、この神殿の副神官長にして、紅珊瑚の使徒としても知られる男――シイレートルである。

水の加護と同時に、炎の加護まで併せ持つ彼は、若い頃には世界中を渡り歩く、腕利きの『聖石の使徒』だったことで有名だ。

類稀な才能と能力を、世界に散らばる瘴気の沈静化に、惜しみなく揮っていた彼が、突然芭蕉の神殿に落ち着いてしまったのは、かれこれ十数年前のことだ。

その原因について、直前の仕事で負った傷が深かったためだとか、能力が枯渇してしまったためだとか、臆病風にふかれたせいであるとか……さまざまな憶測が、無責任に流れたが、彼は一切の説明も釈明もすることなく、芭蕉の地神神殿の副神官長の座におさまった。

そうして、いまではそんな前歴が嘘のような昼行灯呼ばわりされる日々を送っている――としか、見えない彼は、しかしこの時、傍に人がいたならば、「おや、おかしい？」と思うに違いない程度には、いつもと違う雰囲気をたたえて、目の前の相手に対峙していたのである。

困ったような、呆れたような顔をしながら、シイレートルは嘆きを孕んだ言葉を紡ぎ、聞かせた。

「どうにもなりはしないよ、ここに至ってはね……」

その言葉に、彼の正面に立っていた人物――十代半ばに達するかどうかという少年は首を傾げた。

「わたしの意見は、無視されると？」

黒絹のごとく真っ直ぐな髪は、短くはないが長くもない――肩に届くあたりで綺麗に切りそろえられ、ひとつに結ばれている。

シイレートルを見上げる瞳は漆黒で、それはこの緋芭では珍しくない色彩だったが、その肌の色だけが、少々違和感を放っている。

七つある大陸中、最も暑いことで知られるこの緋芭大陸に生まれた者としては、その肌は白すぎるのだ。

もっとも、北の大陸の人間のような、血管までも透けて見えそうな、そんな肌色ではない。

強い日差しに皮膚そのものが傷つけられるような……そんな色彩ではないのだ。

だが、それは緋芭の北部に生きる民の持つような、象牙の肌とも違っている。

白磁の肌、と表現するのが一番ふさわしいのだが、そこに弱々しさは感じ取れない——あるいは、その人物が放つ存在感こそが、そう印象づけているのかもしれないが。

そう——シイレートルの前に立つ存在は、見た目は十四、五の少年にしか見えないというのに、その整いすぎた容姿と、身に纏う独特な空気、さらには抱える特殊な事情ゆえに、周囲の視線と関心を集めずにはいられぬ人物だったのだ……さまざまな意味も含めて。

「そうは言っていない」

宥めるように、シイレートルが告げる。

「だが……君は優秀すぎると同時に無鉄砲すぎる。組ませた相手が悉く、二度と君と組みたくないと訴えて来ている以上、君の要望ばかりを優先するわけにもいかないだろう？」

ちっ、と少年が忌々しげに舌打ちした。

「力を見せなきゃ、人形扱いするくせに……見せたら見せたで、勝手に……っ」

心底忌々しげな言葉を吐き捨てた少年は、しかし一瞬の後、はっとしたように息を呑み、表情を改めた。

「……それで、つまりは、もう打つ手なし、ということですか？」

緊張した顔で、シイレートルに問いかけてくる。
漆黒の双眸には、宣告されるだろう未来に対する絶望の予感がたゆたっていた。
その感情の元凶は、紛れもない少年自身の行為であるのだが、すべてがそうとは言い切れないのもまた事実だ。
だからこそ、シイレートルも手を尽くしたのだし、その結果、少年をここに呼び出したのだ。
「いや」
短く応え、彼は最後の機会を持ちかけた。
「もう一度だけなら、と長老方も折れてくれたよ」
それは、少年にとっては最後の機会――ただし、その彼にあてがわれた相手の事情を考えれば、ほとんど諦めさせるための人選としか思えぬものだった。
だが、それもある意味仕方のないことだった。
そう思うあたり、すでに自分も神殿の体制に染まっているのだと自覚せざるを得ず、なんとも言えぬ複雑な気分になるのだが……仕方あるまい、とシイレートルは思った。
全か無か――選ぶには、あまりにも稀少にして貴重すぎる二つの人材。
だが、今のままでは、ただ腐らせてしまうだけだ。

目の前の少年も、もうひとりの存在も。

ならば、いっそ賭けてみよう――そう思い、渋る神殿上層部に、案を持ちかけたのは、シイレートルだった。

失敗すれば、彼の未来も、目の前の少年とその相棒に選んだ人物のそれも、地に墜ちる。

「もう一度だけ……」

シイレートルの言葉を聞き咎めた少年の瞳に、期待の色が宿る。

追い詰められたとは、彼は感じてはいないのだ。

新たな機会が与えられたのだと、そう感じ、純粋にそのことを喜んでいるのが、瞳を見れば、わかる。

(けれど……ねえ、伽羅)

生まれながらに与えられた名ではなく、より守護の力の強い、神象文字で綴られる名を持つ少年に、シイレートルはため息まじりに思わずにはいられない。

(君という存在が生まれ落ちて以来、この芭蕉国の全神殿は、君を生かすために……そのためだけに動いてきたといっても過言ではないんだよ)

と。

だから。

ここで、一度手放すことを、見捨てただとか、放り出しただとか……そんな風には、絶対に思わないでほしい。いや、それは都合が良すぎるか……現に、これから、自分は彼を国外に放り出すのだから。

「伽羅。君の最後の相棒候補者は、那八にいる。この芭蕉からは遠い上に、今現在聞いた限り、君と組むことに乗り気ではないらしい。どうやら、相当難しい相手らしいということだけは言っておくよ」

上司であるシイレートルの言葉に、『伽羅』と呼ばれた少年は「そうですか」とだけ応えた。

それでも、その漆黒の瞳に、絶望の色はなく、逆に、未来を摑み取る意欲ゆえに、生ける双玉はきらきらと輝いていた――。

1

那八（なや）は緋芭（ひば）大陸最南の、海岸線に添うような形をした、細長い国である。
その国土は決して狭くはないが、広いとも言い難（がた）い、だが数多（あまた）の港を保有することもあり、大陸中でも有数の豊かな国として知られている。
そんな那八の王都……遊羽（ゆば）の地神――アスカニーリ神殿のとある一室に呼び出された青年は、うんざりした様子で上司たる神官の言葉を聞いていた。
鮮やかな赤い髪は、この南の地にあっては稀少（きしょう）なものといえるのだが、彼のことを知る者は誰も、それを不思議とは思わない。
褐色（かっしょく）の肌（はだ）の下には、若々しいしなやかな筋肉が息づいている。
立ち姿を見るだけで、そうとわかる者にはわかる――ある種の『特別さ』を伝えるに充分な資質を窺（うかが）わせるその青年の、見たところの年齢は、十代の後半といったところだ。
鍛え上げられた肉体もあり、神殿を守る神兵のひとり――といった見方が一番無難であろう

が、その彼が呼び出された部屋が、神官長オサラディーンの執務室であるあたり……しかも、青年が緊張する素振りも見せていないあたりで、かなり状況判断は難しくなってくる。

なにより、神官長から呼び出され、普通なら戦々恐々――もしくは緊張と期待とで胸を破裂させんばかりの状況にあらねばおかしいはずの、呼び出された青年の方が、神官長より泰然としているのだ。

どうにも、おかしい。

だが、そんな異常な状況に、気を回す気など、当事者の片割れである赤い髪の青年――セイタマール十六歳には皆無だった。

また、お説教ですか――？

と、彼しか持ち得ない炎の眼差しが、声なく問いかけるのに対し、こうなってから二人目となった神官長――オサラディーンは、苦虫を噛みつぶしたような顔で、声を上げて応じた。

「……仕事だ」

またですか――皮肉げに、やはり視線だけで問いかけてくるセイタマールに、「はっきりと、言いたいことは口に出したまえ」とは、初老にさしかかる神官長は言わない。

神殿が、セイタマールに与える『仕事』に関して、当人がうんざりしていることを十全に知るからだ。

わからないでもない——というのは、決して口には出せない本音だが、役職上、また世界の均衡を考える上で、目の前の青年の『我が儘』を聞いてはいられない。

それもよかろうと、左遷なり任を解くなりして、自由の身にしてやるには、目の前の人物は、かけがえのない資質を持ちすぎているのだ。

なにしろ、目の前の青年は、生まれ落ちると同時に、両親が名付けの儀を果たす前に、かっさらうかのように神殿が引き取り、生まれながらに『使徒名』を与えた、逸材中の逸材なのである。

使徒、とは『聖石の使徒』——強い力を秘めた『聖石』を、その身に宿して生まれてきた者のなかでも、神々から特別に選ばれた存在を言う。

普通は、聖石を抱いて生まれてきた子供のなか、研鑽を積んだ者だけが、神々に直接仕えることを許された者として選ばれるという。

だが、セイタマールは違った。

彼は、生まれ落ちる時と場所、さらにはその外見的特徴までもが巫女の口から伝えられ、生まれると同時に神殿が引き取るようにと、神託が下った人物だったのだ。

当時の神殿関係者は、当然神託に従い、彼を両親から奪うように神殿の保護下に置き、やはり神託通り、生まれながらに『聖石の使徒』たる……使徒名を授けた。

彼が抱いて生まれてきた『聖石』の稀少性と能力を思えば、それは当然なことだったかもしれないが……どこかで、なにかが間違ってしまったことだけは確かだ。

でなければ、セイタマールが神殿の長からの要請に、ここまで渋るはずもなく、また要請する側の神官長にしても、渋る彼に対して遠慮する理由は見あたらないのだから。

だが、その理由にしても、そろそろ限界なのだろう――それが、自身にとって、決して良い方向性には動いていない結果であることを、しっかりと自覚しつつ、セイタマールは受け止めていた。

だから、敢えて煽るような皮肉げな口調で、表情で問い返したのだ。

「性懲りもなく、ですか？」

その冷ややかな笑みには、ここ数年の自身の仕事における失敗件数を、オサラディーンに思い出させようとする意図が宿っていた。

オサラディーンとて、気づかないわけではない、彼の真意を如実に伝えるその笑み、その響き――。

だが、だからといって、オサラディーンもまた、受け入れるわけにはいかぬ事情があるのだ。

だから、彼は気づかぬ顔をして、最後の賭けを持ちかける。

ただし、これまでセイタマールに持ちかけたものとは全く別の方向から。

「ちょっと、違うな」

セイタマールの言葉を、敢えて軽くかわした上で、オサラディーンは告げた。

「問題児を押しつけられた……お前ひとりでも手に余る状況だというのに、難儀なことだよ」

呆れたようにも困ったようにも聞こえるその口調が、はたして本当にオサラディーンの本心からのものかどうかはわからないが、そんな彼の反応を目にしたのが初めてとあれば、セイタマールの双眸にもいつもと違う光が宿るというものだ。

「問題児……？」

そんなものを、自分と組ませてどうしようというのか——明らかに訝る色が双眸に浮かぶ。

そのことに気づかぬはずもなかろうに、オサラディーンは「ああ」と疲れた声で応じた。

「芭蕉の掌中の玉は、どうやら相当な暴れ馬らしいな。大切に守り、慈しみたい周囲の願いをことごとく蹴散らしているらしい」

蹴散らす——とは、また乱暴な表現だ。

しかし、セイタマールは表情を微かに動かしたものの、それ以上、率先して何かを尋ねようとはしない。

興味を覚えて、彼が一歩踏み出すことを、周囲が期待していたのだとすれば、それは完全に

裏切られたと言えるだろう。

だが、そんな彼の態度にも、オサラディーンは何ら反応を示すことはなかった。

「まったく……とんでもない暴れん坊だよ」

ぶつくさと、その人物の調査報告書らしきものをめくりながら、うんざりした様子を隠しもせずに文句を垂れる。

そうして、聞くともなく聞かされた、問題の『暴れん坊』の所行に、セイタマールは（だからか）と、ひとり勝手に納得した。

組んだ相手を、悉く治療院送りにした挙句、二度とともに組みたくはないと言わせたその人数――実に五人。

そこまで問題を起こすとなれば、いかに生まれながらの資質が素晴らしかろうと、適性に問題有りとの見方が出てもおかしくはないだろうに、芭蕉はわざわざ那八に預ける形を取ってまでして、その人物を切り捨てまいとしているらしい。

よほどに才能に恵まれた人物なのだろうとは、そこまでの話を聞けばわかることだが――ひとつ、わからないのは、その相手になぜ自分を選んだのかということだ。

セイタマールが、仕事上における黒星を上げるようになって、足かけ五年――実質四年が経とうとしている。

最初の頃こそ、気遣い、慰める者も多かったが、さすがに最近では、周囲も諦めの空気を隠そうとはしなくなった。

もっとも、慰められるのは、却って苦痛でしかなかったから、今のほうがありがたいという思いはあるのだが。

向こうが『問題児』なら、こちらは『落ち零れ』だ。

そんな二人を、敢えて組ませるその理由とは、いったいなんであるのか……。

自分が考えても仕方がない——早々に思考を放棄したセイタマールに、オサラディーンがため息混じりに頼みこんできた。

「ともかく無茶をする子らしいから、身体能力の高い相手をつけてくれ、との絶対の要請だったものでな……すまんが、頼む」

それは——つまり、相手が求めるのは護衛としての能力のみということだろうか……？

それに、自分が選ばれたというのであれば、それは……その意味するところは明らかで。つまりはそれしか求められてはいないということで。

以前の自分であったなら、恐らくそのことに、猛烈な抗議をせずにはいられない憤りを覚えたに違いないが、今ではすとんと「ああ、そうか」と得心するばかりだ。

ああ、そういう運びになったのか——と。

「わかりました」

大した感慨もなく、その事実をセイタマールは受け入れ、うなずいた。

それは、この那八における自分の価値の失墜を意味していたのだが、現実問題として、セイタマールにはどうでもよいことだったから、惜しいとも悔しいとも思いはしなかった。

なぜなら、セイタマールは、未だに周囲が捨てきれずにいる、自分に対する期待こそが無用にして間違ったものだと認識しているからだ。

どれほどの『資質』を持つ相手かは知らないが、周囲が期待――する分はどうでもいいが、本人もまだ先に進むつもりがある人物を守る盾の役割を、自分が果たせるのなら、それでいいと思えたのだ。

自分には、もう二度と、宿すことのできない志であるから――そう、すでに朱に塗れたこの手を持つ自分には、かなわぬ道なのだから……。

「どうも、初めまして。芭蕉から来ました、伽羅と申します」

芭蕉における正装――綿の上下の上に、芭蕉布のゆったりした一重を羽織った格好で、伽羅

は引き合わされた新たな相棒を前にぺこりと頭を下げた。

十六と聞いたが、見たところでは二つ三つ大人びて見える。

自分は十四だが、実際の年齢より小柄であるため、外見上は半回りほど違う組み合わせに見えるかもしれない——うんざりしつつも、伽羅はその事実をしっかりと受け止め、受け入れる。

本音を言えば、歯ぎしりしたいほど、悔しかったのではあるが。

(なに食ったら、そんなにでかく育てるんだかなっ！)

八つ当たりだとわかっていても、思い切り睨みつけたいところだったが、そこまでしてはさすがに猫が剝がれるだろうということで、必死に我慢した。

たとえ、どれほどうらめやましい体格に恵まれて、しかも充分すぎる以上の資質を持ちながら、それらを溝に捨てようとしている罰当たりであろうとも、この目の前の青年が、自分にとって、最後の命綱であることに変わりはないのだ。

(そう……短気は禁物だ)

必死に自分に言い聞かせる。

少々難しかったが、とりあえずは成功し、猫を剝がさず対応できる程度の余裕を取り戻す。

「セイ……師には、お世話をかけるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします」

礼儀正しくそう告げると、青年――セイタマールは一瞬、なにか言いたげな目をしたものの、すぐにその光を消し、「師、はいらない」と答え、さらに続けた。
「それと、その気色の悪い笑顔は引っ込めろ。虫ずが走る」
突然の、あまりにもあまりな言葉に、伽羅の表情はぴきりと凍り付いた――。

箱入りのくせに、妙な目をした子供――。
というのが、セイタマールの伽羅に対して抱いた第一印象だった。
生まれと育ちの良さを窺わせる容姿は、衆目を集めるに充分で、神殿の者でなくとも、ひとりで外に出そうとは思わないだろうほどに整っていた。
漆黒の髪は絹糸のごとくつややかで、肩までしかないのが惜しいほどだ。伸ばせば、さぞ見栄えがするだろう。
白磁の肌にはシミひとつなく、世の女性の多くが焦がれるに違いないほどに肌理細やかだ。
長い睫毛に縁取られた瞼の奥から覗く瞳は漆黒――極上の黒曜石か、黒玉か……。
すらりと伸びた、細い四肢――どこか性を感じさせない体つきを、本人は悔しく思っている

ようだが、なんとも言えぬ風情があり、一目で多くの視線を引きつけて離さない。

（なるほど）

これは、外部に出したがらないはずだ、とセイタマールは思った。

この容姿に加え、神象文字で綴られる、加護篤き名を持つとなれば、神殿としては大切にしまい込んでおきたくなるに違いない。よほどの資質を与えられた者でなければ、その名を与えられることはないのだから。

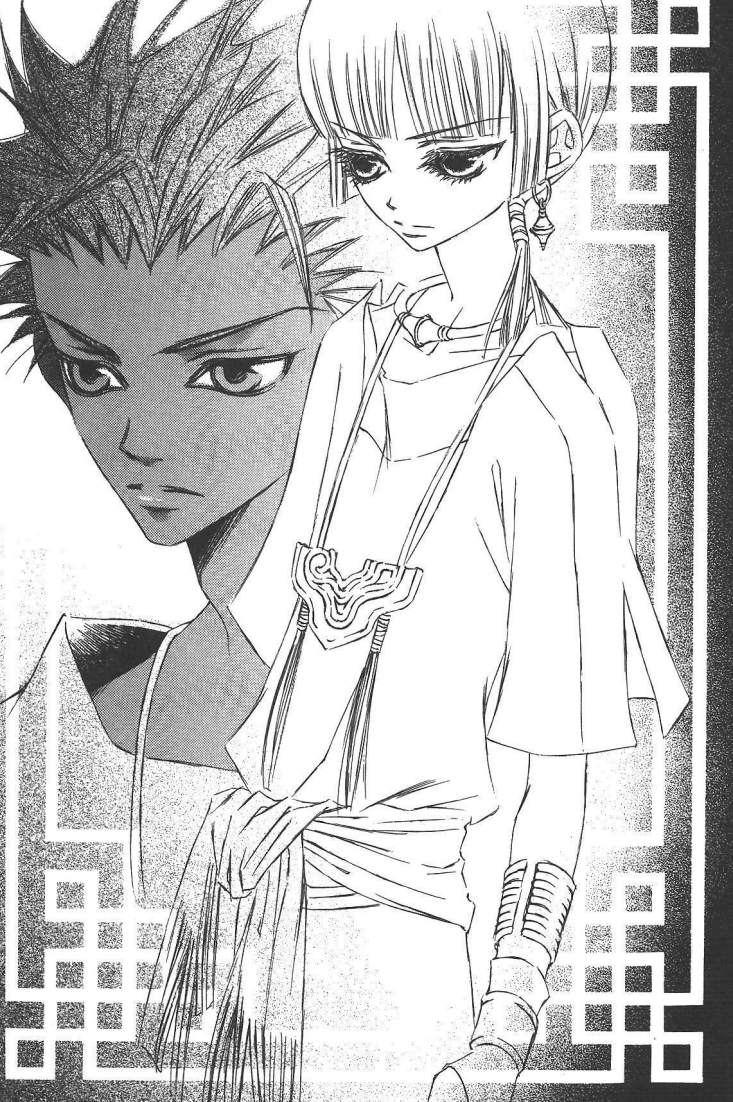
もっとも、外に出したくない理由も、その名にあるのだろうが。

父母から授けられた名だけでは、守りきることが難しいと見なされた存在――それは、それだけ周囲の危機感を誘う要因が、この少年のなかにあることを意味する。

資質の種類か、それとも別のなにか――そこまではわからないが……何にせよ、伽羅を送りつけてきた芭蕉の神殿は、彼の今度の仕事が不首尾に終わることを期待しているのだ。そうすれば、二度と彼を外に出さずにすむということで。

そのための相棒に、自分が選ばれたというのなら、その意はこの那八にも伝わっているということだろう……とうに、能力を失った、この落ち零れをつける理由など、他には考えられない。

だが、それを汲み、望みに添うかどうかはこちらの自由だ。



だから、相手を見てから決めようと、セイタマールは思っていた。そうして、対面した少年は――十四という年齢に相応しからぬ、いやらしい笑顔の仮面を着けていた。

礼儀正しく挨拶してくる様子は、実に目に楽しいもののはずだったが、真情を宿していない瞳でいくら笑われても、少しも美しくは見えなかった。

（気に入らない……）

子供らしくない――と、自分のことは高く棚に放り上げて、セイタマールは思った。

これは、あちらの意向に添うべきだろうか……。

早々に見切りをつけた彼は、しかしそれも面白くはない気がして、取りあえず、もう少し伽羅を観察することにした。

……セイタマールと伽羅。

出会いにおける、二人の互いに対する印象は、最悪だったと言えるだろう。

2

人間、望みを果たすためには、時にイヤなことでも我慢しなければならない。
そんなことは、これまでの長くはない人生のなかでもわかっていたことだったが……今回は、極めつけに忍耐を要する事態かもしれない、と伽羅は思った。
那八の南西に位置する、港町――浮曄。
その街中を、伽羅はセイタマールと歩いていた。
船が港についたせいか、街はひとで溢れている。
活気に満ちた空気は、呼吸するだけで心を浮き立たせてくれるのが常なのだが、今日ばかりはそう言い切れなかった。
原因は、隣を歩く仏頂面の青年だ。
「セイ……その」
手を放してはくれませんか――と、頼んだ伽羅に、セイタマールは答えない。

どうやら願いを叶えてくれる気はないらしい……摑まれた右の手首の拘束は、緩むことがない。

仕方ないこととはいえ、伽羅はため息をつきたくなった。

（確かに、街に入ってから、二度もはぐれかけたのは、わたしのせいだが……）

なにしろ、これまで数える程しか、神殿の外に出たことがない伽羅にとって、外の世界である街は、なにもかもが珍しく、興味を覚えずにはいられない宝箱のような存在だった。

これが調査のための訪問だとわかってはいても、好奇心のまま、つい露店を覗きこんだり、道の端で繰り広げられる大道芸に見入ってしまったり、芭蕉とは全然違う様式の建物に目を引かれてしまったりして、そのせいではぐれたのだから、明らかに非は自分にある。

わかっている。それはわかっているのだが。

三度目はご免とばかりに、仏頂面のセイタマールに、手首を摑まれた格好で、歩くのはあまり嬉しくない。

（子供じゃないんだから……）

「セイ……」

聞こえぬふりをしているとしか思えない青年に、もう一度呼びかけてみると、鮮やかな赤毛の青年は、じろりと見下ろしてきた。

「紐で繋がれたいか？」
「……いえ、遠慮します」
「そうか。なら、あまりきょろきょろするな。掏摸に目をつけられるぞ」
旅行客は狙われやすいんだ。
もっともな忠告に、うなずきたいのはやまやまだったが、珍しいものは珍しいのだ。きょろきょろしないためには、足下を見て歩くしかなく、それはそれで危ない。
そして、なにより――。
「行くぞ」
セイタマールがそう告げると同時に歩き出す。
苛ついているのか、その動きは唐突で――伽羅はバランスを崩して転びそうになってしまった。
「なにをしている」
呆れたような目を向けられ、伽羅は口に出しかけた文句を喉の奥に呑み込んだ。
歩幅の違いを考慮しろ――とは、なにやら悔しくて、言えなくなったのだ。
（人生、忍耐が肝心）
自分自身に言い聞かせながら、伽羅は遅れないように、足早について行った。

セイタマールが決めた宿は、歓楽街からは離れた地区にある、落ち着いた雰囲気の建物だった。

ふたりとも、それなりにいい身なりをしていたため、あまり格式の低い店だと悪目立ちする危険があったからである。

もっとも、その原因が自分にあることを知っているため、伽羅はそのことについて不満は口にしなかった。街の住民から話を聞き出す上では、もう少し簡素な格好をしたほうがいいのだが、伽羅の場合、下手に周囲と同じ服を身につけると、似合わずに周囲から逆に浮いてしまうのだ。

落ち着いたところで、荷物を開き、ふたりはこれからのことを話し合った。

今回、伽羅とセイタマールに命じられた任務は、この浮嶂で最近立て続けに起きている変死事件の調査である。

港町であるこの浮嶂は、当然のことながら、内陸部に比べて、水による死者が多く出る。

だが、それだけに水に親しい住民たちは、海や水とのつきあい方を弁えており、それらのほ

とんどは、不可抗力によるものが大半なのだ。
少なくとも、海辺で暮らす者としての常識から逸した行為によって、命を落とす者は、ほとんど皆無と言っていい。
にも拘わらず、この町では『あり得ない』水による死者が出ているらしい――という報告が、首都たる遊羽にもたらされたのだ。
しかし、当の浮暉からは、一切そうした報告はない。
ただの偶然か、あるいは密かに何事かが起こっているのか――それを調べるために、伽羅とセイタマールは派遣されたのだ。
「……街を歩いた限りでは、そこまで凝った瘴気は感じられませんでしたが、街全体を調べたわけではありませんから、はっきり、どう、とは言えませんね、まだ」
取り出した着替えを、部屋に備え付けの衣装ダンスに仕舞いながら、伽羅はこの宿に着くまでに感じた街の空気の印象を述べた。
そんな伽羅に、セイタマールが少しだけ驚いた顔を向けてきた。
「ああ、お前は気配に聡いんだったな」
類稀なる能力と、まるで引き替えにしたかのように、感知能力にはほとんど恵まれなかった青年の言葉に、伽羅は、もう何度目になるかわからない、ため息をつきそうになった。

「セイは……そちらは不得手でらしたんですよね……」

（いいよなぁ……）

気づかれないよう、こっそりと呟いた。

伽羅にはいくつかの特殊な能力があるが、その内のひとつが、瘴気を感知するそれだった。だからこそ、この調査に選ばれたのであるが、伽羅としてはあまり嬉しいことではなかった。

それというのも、水の気配の強い場所では、通常より敏感になってしまうというのに、港町には古今東西の死者の念やらなにやらが流れ着くことも多く、あまりにもその手の気配が多すぎるせいで、却って対象を特定するのが難しくなるからだ。

しかも、数日前の嵐のせいで、船の入港が重なったという今日は、海やら船やらから新たに流れ込んできた念や瘴気やその他諸々が街中に溢れていたから尚更だった。

頭痛がする。

だが、そんな弱音を吐いている場合ではない。

たとえ、どれほど気分が最低であろうと、相棒がどんなに気に食わなかろうと、伽羅にとって、これが最後の機会なのだ。

幼いころから、自分を可愛がってくれた、シイレートルは、優しいが決して言を翻さないひとである。

その彼が、「もう一度だけ」と言ったのだ。
これを逃したら、伽羅の身柄は芭蕉のアスカニーリ神殿に強制送還、終生籠の鳥人生が決定してしまう。
それだけはイヤだから、ここはもう、頑張るしかないのだ。
「……ひとつ言えることは、雑多な気配は入り交じってますが、それでも安定を欠くというほどではないということです。この程度の気の乱れなら、さほど珍しいことではないと思われます……」
実際に、街に下りてその空気を感じ取ったことは、これでようやく六度目の伽羅だ。
確信を以ての断言はできない。
けれど。
（わたしが、この水の気配の濃い土地で、正気を失う予感を覚えないということは、差し迫った歪みは生じていないはずだ……）
海と水の加護を篤く受けた伽羅だからこそ、そう言い切れる。
そして、だからこそ、おかしいのだ。
「だのに、水に拘わる変死者が続出している……それが事実なら、何か、隠された場所で大きな歪みが育まれている可能性が、あります」

きっぱりと言い切った伽羅に、セイタマールがもの問いたげな視線を向けてきた。
「水に拘わる……？　そんなことは、聞かされなかったが？」
遊羽の神殿でのことだろう――それはそうだ。
伽羅も、そうと確信したのは、この街に着いてからなのだから。
「ああ。均衡を崩すほどではありませんが、最近の死者の気配が、悉く水に拘わるものでしたから……わたしは、水の宮の日の水の宮の刻に生を受けたものですから、水の気配には殊更敏感にできているんです」
ああ、でも水神の名付け子ではありませんよ。
相棒となった青年が、『水の加護』に過敏に反応するということは、前もって聞かされていたため、余計な心配を避けるためにもきちんと言っておく。
「なるほど。だが、それだけで、神殿が神象文字による名前を授けるとは思えないな。お前が生まれながらに抱いてきた聖石はなんだ？」
もしかして、水に縁深い石なのか――？
問いの形を取りながら、その声には確信が宿っていた。
（……普通、最初に尋ねることだと思うけどねえ……ま、それだけこちらに関心がないというわけで……ある意味、ありがたいけどね）

深くつつかれたくはない事情が、伽羅にはあった。
だが、今訊かれたことは、隠すようなことではない。
懐から、絹に包んだ石を取り出し、伽羅はセイタマールに差し出した。
それは、伽羅が抱いて生まれてきた『聖石』ではなかったが、その子供石と呼ぶべきものだった。使徒名を持たぬ伽羅の聖石は、今も芭蕉のアスカニーリ神殿に保管されているのだ。
包みをほどき、その石を――正確にはその色彩を目にした瞬間、セイタマールが眉宇をひそめた。
その、漆黒の輝きゆえに――。
「……水の宮の日の水の宮の刻、水の属性を持つ漆黒の石を抱いて生まれた……そのせいか、伽羅という名を授けられたのは」
うなずく代わりに、伽羅は小さく肩をすくめた。
重なりすぎる水の加護は、時に授けられた人間を危険に晒す。水神は海女神アイルトーリの息子であるから。そして、アイルトーリは最も月の影響を受けるとされる存在であるから。
今は失われた喪月神のそれすらも――。
「そういうことです。そして、だからこそ、上の方々はわたしを外に出したがらない……」
自嘲を孕んだ笑みが浮かんだ。

——篤すぎる水の加護を受けた者は、危険もまた呼び込みかねない存在なのだ。

そんな伽羅の後頭部に、セイタマールの容赦のない拳が見舞われたのは次の瞬間のことだった。

たとえではなく、本当に目から火花が散るかと思った。

それほどの衝撃を、伽羅に与えた当事者は、実に機嫌の悪そうな顔をして、地を這うような恐ろしい低い声で、短く告げた。

「中途半端な足掻きなら、やめろ。巻き込まれるこっちは迷惑だ」

思いやりだの励ましだの、一切含まれないその声に、伽羅は（イヤなやつー）と思うと同時に、なにやらすっきりするものも感じた。

強すぎる水の気に、知らず引きずられていた自分を悟る。

水は流れることで澄み、留まることで淀み、煽られることで揺れる。

揺れるのは、水に親しむ者の性——幼い頃から叩きこまれてきたことだから、自覚していると思ったが、それはあくまでつもりに過ぎなかったらしい。

（それを、こいつのおかげで知ったというのは、なんだが業腹だけどな）

むっとするものを感じつつ、（だけど、その言い分はどうなんだ？）とも思いつつ、伽羅はセイタマールを睨みつけながら、答えた。

「そうですね、気をつけます」
抑えようもない怒りが、その声には宿っていた。

「だからって、なんでわたしを置いて、ひとりで出かけるかなー、あのひとは！」
夕刻、宿の一室で、伽羅は不在の相棒に文句を垂れていた。
慣れない『外歩き』と、浮曄にまつわる不穏な噂の真相をつきとめるべく、神経を張り詰めていたせいで、確かに伽羅は宿に落ち着いた時点で、かなりけっこう疲れてはいた。
その自覚はあったし、だからこそ、セイタマールの「少し休んでおけ」という言葉にも、素直に従ったのだ。
仮眠を取れば、時間帯的には夕食時となるはずで、そのときセイタマールとともに街に出かければ、件の変死事件についての聞き込みもできると思っていたというのに！
目覚めた時には、すでに外は暗くなっており、それどころか、相棒であるはずのセイタマールの姿はどこにもなかった。
伽羅を置いて、どこかに勝手に出かけたのは明らかだ。

その目的が、昼間では聞けない街の噂のあれこれを拾うことだというのは容易く想像できたがしかし、（黙って行くことはないだろう）と、思わずにはいられない。

「せめて、書き置きぐらい……」

呟きかけた伽羅は、そこに宿る甘える響きに、きゅっ、と唇を噛みしめた。

（いけない）

と、自分を戒める。

自分は、甘えてはいけないのだ。

自覚はなくとも、そうした結果、五人ものひとたちを傷つけてしまったのだから。

芭蕉にいるころに組んだ、五人の相棒たち。

誰一人として傷つけるつもりはなかった。

皆、優しかった。

皆、当たり前のように、自分を守るために手を差し出して来て——そのことに、息苦しさを覚えたのが、きっと失敗の原因だったのだと思う。

彼らの優しい手の制止を振り切り、駆けつけた先で起こった、様々なこと。

そのほとんどは、無茶を働いた自分にではなく、彼らに降り注ぐことになった。

それは全て、揺らぐことを止められない、この心のせい——。

だが、後見人たるシイレートルは言った。
『それでも、君が自らの道を歩きたいのなら、揺らぐ自身に確たる足場を持ちなさい』
と。
恐らく、それを得る機会は、今回が最後だ。
だから、下らない感情に左右されている暇はない。
この仕事で、自分がきちんと『不必要に揺らがない』、『しっかりとした足場を持っている』ことを示さなければならない。
けれど――。
自分だけでは、それは示せない。
そのためには、セイタマールの協力が必要不可欠なのだ。
（自分でできる分の努力は、自分でやるとして……）
問題は、その後だ。
（こんなに簡単に、わたしを置き去りにするひとに、わたしのことを認めさせることなど、果たしてできるだろうか……？）
心を過った、不安な思い。
しかし、その自覚した弱気こそが、伽羅の心を奮起させた。

この地を覆う強い水の気配に、少なからず影響を受けていたことを自覚した伽羅は、そうと知った瞬間、あらゆる繭を脱ぎ捨てた。

つまり――。

被っていた猫を放り出したというわけである。

3

「収穫はありましたか？」
翌日の朝、宿の一階にある食堂で、ともに朝食を取りながら、伽羅はセイタマールに昨夜の成果を尋ねた。
本当は彼が帰ってくるのを待つつもりであったのに、疲れのせいで先に眠ってしまったため、昨日は訊けなかったのだ。
「ないな、これと言って」
船乗りが集まるという飲み屋に出かけたというセイタマールは、淡々と答えた。
「そうですか」
うなずきながら、伽羅は小首をかしげた。
「……今日は、街で聞き込んだほうがいいかもしれませんね」
航海から戻ったばかりの船乗りたちは、あるいはここのところの浮薄でのことに通じていな

いのかもしれない。

だとしたら、街の住人をあたったほうが、話は聞き出せるかもしれない。

その思いは、セイタマールも同じだったと見えて、赤毛の青年もうなずいた。

しかし、その口から飛び出した言葉は、伽羅には看過できないものだった。

「それはおれがやる。お前は今日一日休んでいるといい」

（なんだって？）

聞き捨てならない台詞に、伽羅はきつい目で青年をねめつけた。

「休息なら充分取らせていただきました。まさか、外に出るなとおっしゃるんですか？」

言葉遣いは丁寧だが、それは無礼さを孕んだ慇懃さというものだった。

「お前を連れて街中には出たくないな、確かに。理由を聞きたいか？」

地道な聞き込みをするのに、お前は目立ちすぎる——言外にそう告げられて、伽羅はきり、と唇を噛んだ。

「もう少し地味な服を着れば……」

「クジャクが鴉の羽をつけたところで意味はない」

一言で却下される。

（どういう譬えなんだ……）

自らの貧弱な体格に、劣等感を抱いている伽羅には、彼の真意は読めなかった。

「だからといって、わたしは宿に籠もるために、浮曄に来たわけではありません」

セイタマールがどういうつもりであろうと、自分の意志を曲げるつもりはない。

なんとしても、この仕事を完遂し、神殿の外で生きる資格を手に入れるのだ――とは言っても、このままでは青年と組み続ける未来というものが見えてこないのだけれど。

そんなことを思っていると、セイタマールが感情の窺えない目で、伽羅を見つめてきた。観察するような、検分するような、あまり気持ちのよくない視線に、伽羅は不快な気分が湧き上がるのを感じた。

「せめて、今日一日ぐらいは休めと言っているんだ。お前は気づいていないかもしれないが、まだ顔色が悪いぞ。出先で気分が悪くなったらどうするんだ」

その言葉は確かに伽羅を気遣うものではあったが、声に宿る響きには、その心情はかけらも含まれてはいなかった。

いや、彼本人は、そう思っているつもりなのかもしれない。だが、それは薄膜を一枚間に挟んだもののようで、直接伝わってはこない。

なにか……、猛烈に腹が立った。

「お心遣いありがとうございます。ですが、この街にいる限り、これ以上どうこうなることは

ありません。わたしの同行が、あなたのご迷惑になるというのでしたら、わたしはひとりで調べさせていただきますから」

ごちそうさまでした！

まだ半分以上残っている料理を放り出して、伽羅はさっさと立ち上がった。

「おい」

呼び止めようとするセイタマールの声が聞こえたが、伽羅は気づかぬふりをして、さっさと部屋に戻った。

上着を羽織り財布を懐にしまうと、追いつかれる前に、宿を飛び出した。

目指すのは——この街の地神神殿だった。

朝もまだ早いというのに、街にはひとが溢れかえっていた。

幸い、人波に逆らう必要はなかったため、流れに従うように、神殿に向かう。

道の端の屋台から、海鮮粥のいい匂いが漂ってくるが、とても今はものを食べたい気分ではなかった。

（なんなんだ、あいつは！）

脳裏に浮かぶのは、赤毛の青年の顔だった。

（仏頂面も腹が立ったが、あんな偽物の気遣いをされるよりは百倍マシだった！　ひとの猫を気色悪いと言う前に、自分のことをどうにかしたらどうなんだ！）

あんな、記憶にある感情をなぞるような態度を取るぐらいなら、嫌悪されるほうが、まだましに思える。

（いや、別に嫌われたいわけじゃないけどさ……嫌われたら困るというか……）

何しろ、最後の相棒候補なのだ。

彼にまで断られたら、自分の未来はない。

（それにしても、あいつはまだ十六のはずだろう……？　なんだって、あんな奇怪しなことになってるんだ？）

考えたくもないのに、気になって仕方がない。

遊羽の神殿で引き合わされて、すぐに気づいたことだが、セイタマールは神殿内部で、明らかに特別視されていた。

同じような視線を、自分も芭蕉で向けられていたから、間違いないと言い切れる。

だが、祖国で自分に向けられていたそれと、セイタマールに向けられるものとの間には、決

定的に違うなにかがあった。

その原因とおぼしき事件のことは、前もって聞かされていたけれど、なにがどう結びつくのか、よくわからない。

（初めて本格的に組んだ相棒を死なせたって話だけど……）

それまで、将来有望な聖石の使徒として、何度も瘴気に纏わる事件を解決していたというセイタマールは、その事件以来、うまく力を制御できなくなったらしい。

それが、四年前のこと——当時十二歳だったセイタマールの心に、どれほど大きな傷を残したか、想像に難くない。

（けれど……）

いつのまにか、考え込んでいた伽羅は、背後から突き飛ばされたその衝撃に、はっと我に返った。

「往来でつっ立ってんじゃねえよ！」

ぶつかった男が、憎々しげに吐き捨てて、遠ざかっていった。

「あ、すみません」

反射的に謝って、伽羅はそうだ、と自分に言い聞かせた。

（そうだ、こんなところで考えるようなことじゃない）

自らの頬を、軽く両手ではたき、伽羅は見えてきた神殿に意識を移す。
まずは、調べなければならない。
この浮曄の神殿で扱われている守り石のことを――。
水に纏わる変死を遂げた者の幾人かは、確かに守り石を持っていたというのだから。
守り石の頒布を、原則的に神殿が独占している以上、無関係とは考えにくい。
もしかしたら、浮曄の神殿がなにも言わないのは、そのことが関係しているからなのか、と伽羅は思った。
「……なんにせよ、あいつと一緒には行けなかったから、ちょうどいいな」
と、独りごちながら、伽羅は地神神殿へと足を運んだ――。

神殿に入ってすぐの場所に、守り石を頒布する購買所があるのは、全神殿中アスカニーリ神殿だけである。
聖石の子供石は、その石種や色によって、守護の性質が変わるため、何の守護を得たいかによって、求める守り石は変わってくる。

炎の加護を得たい場合は、赤か緑の石、風の守護が欲しければ青か紫、金気は透明か、白色、土なら黄色だ。

そして、こんな港町で最も望まれる、水の加護を宿すのは、黒曜石や黒玉、黒瑪瑙などの漆黒の石である。

購買所の硝子の棚のなかには、さまざまな石が並んでいる。

大粒のものは、資産価値も高いため、神殿の奥で厳重に保管されているが、それを見せてもらわずとも、神殿の扱う守り石の質を確かめるだけなら、購買所に並ぶもので充分だった。

というか、あまり奥に入り込むと、自分が一般客でないことが気取られかねないため、こちらを選んだのだ——気配に敏感な使徒にでも見つかれば、伽羅が普通でないことを見抜かれてしまうに違いないのだから。

(ふうん……全体的に小粒だけど、質は悪くないな。あの赤いのは尖晶石かな？　あと、あの紫は杉石だ。瑠璃もある。なかなか力が強い石も混じってるな)

強い感知能力を持つ伽羅は、そのせいで守り石に宿る力の強弱まで読み取ることができる。

つまり、一見それらしく見えるだけの普通の石と、聖石の子供石を間違うことはあり得ないのだ。

(まさか、子供石でもないものを、安価で売りつけるような真似を、神殿がするとは思わない

けど、以前似たようなことをした神官がいたって話は聞いていたから、一応確認だけはしておくつもりだったんだけど……神殿は潔白だな）

多少の安堵を覚えつつ、伽羅はそう思った。

さすがに、自分の属する組織が、罪に塗れているというのは切ないものだ。恐らく決して還俗など認められないことを思えば、綺麗であってほしい――全体を見た場合、純白とは言い切れないことを知るから、尚更。

「何の加護をお求めです？　よければ選んでさしあげますが？」

店番も兼ねているらしい下位神官が、にこにこと笑いながら声をかけてきた。

伽羅の身なりから、冷やかしではないと判断したのだろう。

気になることもあり、伽羅は話に乗ることにした。

「この街に来てから、ちょっと水の気にあてられたみたいで……外からの水の気を阻んでくれるような石はありますか？」

伽羅の『普通ではない』質問に、神官はおや、と言いたげな顔になった。

「水の刻生まれのせいか、気配には敏感なタチなんです。ただ、こんなに海に近づいたのは初めてで……どうにかならないかな、と」

苦笑混じりに、事情を説明する。

嘘ではない——海辺の街に来たのが初めてなのも本当だ。

ただし、外部からの水気に対抗するための守り石は、すでに持っている。芭蕉の第一神殿に属する黄玉の使徒が生み出した子供石は、懐で伽羅を守っている。

だから、本当に聞きたいのはそのことではない。

しかし、そんなこととは知らない神官は、「そうか、そうだねえ」と首をかしげた。

「水気に剋つのは金気だから……黄色い守り石、かな。ここにあるのは黄水晶だけど、小粒なものばかりだから、あまり役には立たないかなあ……何なら、奥に保管してある大粒のものも見てみるかい？」

奥への案内を口にした神官に、伽羅は「せっかくですが」とかぶりをふった。

「やめておきます。これくらいなら、何とか手持ちで買えるかな、と思っただけで……でも、効果があまり望めないのなら……ここにも、そう長く滞在する予定ではないので」

残念そうに答えると、神官もそれ以上勧めようとはしなかった。

「そうかい。まあ、大粒ともなると、個人の波動に合わせたり、あれこれ手間もかかるからね。長くいるのでなければ、わざわざ手に入れることもないね」

購買所の収入は、馬鹿にできない額になることもあるため、店番をする神官は、あれこれ購入を勧めるものなのだが、どうやらこの男性は、珍しい例外のようだ。

（まあ、神官が商人よろしく金儲けに勤しむというのも嘆かわしい話だから、こういうひとがいてくれるのはいいことだよな）

目の前の神官に、好印象を抱きながら、伽羅はようやく本題を切り出した――ただし、あくまでさりげなく。

「そういえば、黒い守り石が、他の色のものに比べて数が少ないんですね。やっぱり、街のひとや船に乗るひとが、買っていかれるせいですか？」

ちらりと伽羅が目を向けた先――棚に並ぶ黒の守り石は、他の石の半分ほどしかなかった。

そんな伽羅の問いかけに、神官は苦笑混じりに「逆だよ」と答えた。

「逆？」

「この街の皆は、滅多に神殿で黒の守り石は買わないんだ。リワンダさんが、加工で余った分を、ただ同然で譲ってあげているからね。だから、ここに黒の守り石を買いに来るのは、他所から来たひとたちばかりなんだ。ぼくとしては、やはり神殿で買ってほしいんだけどねえ」

リワンダさん、ね。

こっそりとその名をつぶやき、伽羅はさらなる情報を得るべく、神官を見つめた。

未だ、暗中模索の状態だけれど――否、だからこそ、手がかりとなる材料は、ひとつでも多く手に入れておくべきだった。

「加工って……そのリワンダさんという方は、宝石商なのですか？」

「アーカイド・リワンダ……ね」

不機嫌な面持ちで、伽羅は神殿前の広場のベンチに腰を下ろしたままつぶやいた。

先ほど神官から仕入れた情報を、脳裏で整理する。

アーカイド・リワンダ――この街で唯一の、聖石の子供石の加工資格を有する宝飾商リワンダ商会の社主。

主に富商や貴族を相手に、大粒で質のよい聖石の子供石の加工を請け負う商人である。

宝石が地中から掘り起こされるとき、研磨された状態でないのと同様、聖石の使徒や子供が、『子供石』を生み出すとき、それらは装飾品に相応しい姿を取ってはいない。

それを、力を損なうことなく研磨し、装飾性を高めるには、特殊な技能が必要であり、それゆえに加工資格を持つ商人の数は少ない。

小粒なものが、裸石の状態で、守り石とされるのはそのせいだ。

もちろん、そのままで充分、守護の力となり得るのだが、経済的に豊かな者の中には、さら

にそこに洗練された美まで求める者も多く、そうした者達を、リワンダ商会は客筋として持っているのだ。

大粒の子供石を研磨した際に出る欠片石とはいえ、子供石であることに違いはなく、守り石の力は宿っている。

アーカイド・リワンダは、その欠片石を、街の皆にただ同然で譲っているのだという——自分のいまの成功は、この街のおかげなのだから、と。

美談である。

美談ではあるのだが……なんだろう、何かが引っかかるような気がしてならない。

（欠片石だからって、力が宿ってないわけじゃない。守り石を持っていたのに、水の事故に巻き込まれた……まあ、力にもよるから、おかしいとは言い切れないか？　だが、加工途中でそれほど大量に欠片石が出るものかな？　だけど実際、あの神官は、この街の者は神殿から守り石をまず買わないって言っていた……）

わけがわからない。

うーん、と伽羅は頭をひねった。

（黒の守り石に関することだからと気にしすぎか？　欠片石の力が及ばなかったというだけで、今回の件にアーカイド・リワンダは無関係なのか？　そもそも、変死が続いているという

話にしたって、ここに来る途中でも、耳にしなかったよな）

何が正しく、何が間違っているのか、それすらもわからないでは話にならない。

そもそもの変死に纏わる噂とやらの真偽もまだ、わからないままなのだ。

（流言飛語の類だった、とか……？　まさか、その確認のために、わたしたちが派遣されたのではないだろうな……？）

疑い出せばきりがないのだが、伽羅は少し前に、落ち込む出来事があったため、思考が後ろ向きになりかけていた。

（まさか、わたしに失敗させるために、今度の事件を神殿が捏造した……なんてことは、さすがにないよな？）

ない――と信じたい。

だが、これまでのことを考えると、一概に穿ちすぎだとは言い切れない……ような気もして、伽羅はますます混乱した。

（ああ、駄目だ。何もかも、疑ってかかるようじゃ、先は見えないのに……）

浮曄に集まっている念や淀みが、重くのしかかって、どうにも頭がすっきりしない。

（ひとつでいい……確実に信じられる取っかかりさえあれば……）

それをもとに、辿ることもできるのに――。

我知らず、ため息が出た。
そんな伽羅の目の前に、小さな花束が差し出されたのは次の瞬間だった。
（え？）
慌てて顔をあげると、そこには大きな籠いっぱいの花を抱えた、十歳ぐらいの少女がにっこり微笑んでいた――。

4

「お兄ちゃん、神殿でお守り石、貰えなかったの？」

花売りらしい少女の、唐突な質問に、伽羅は思わず苦笑した。

よほど深刻な顔をしていたのだろう——心配されているのだと悟り、自分の意外な脆弱さに舌打ちした。

（念のせいで気分が悪かったとはいえ、なにをやってるんだかな……）

それでも、見ず知らずの自分を気遣う少女の優しい心に癒され、ゆっくりとうなずいた。

「そうなんだ。どうやら途中で財布を落としてしまったらしくて……それでちょっと落ち込んでいたんだ」

実際、情報提供してくれた、あの人のいい神官へのお礼のつもりで、土気を宿す水晶の守り石を購入しようとしたところ、宿を出る際、確かに懐に仕舞ったはずの財布がなくなっていることに気づいたのだ。

そのことを告げると、人のいい神官はしきりに伽羅に同情してくれて、ますます申し訳なくなってしまった。

「お兄ちゃん。それ、多分落としたんじゃなくて、スられたんだと思うよ？」

哀れみも露な少女の言葉に、「……うん。そうだろうとは思った……」と答える。

神殿に着くまでに、何人かとぶつかったことを思い出す。恐らくそのうちの誰かによる仕業だろう。

（きょろきょろしてなくても、掏摸に狙われたよ……）

このことを知ったら、セイタマールがどう反応するか、考えるだけで憂鬱になる。

はあ、と息をついた伽羅に、少女は「お兄ちゃん、可哀相」とつぶやいた。

少女に悪意がないことはわかるが、このタイミングで、その言葉は痛すぎた。

どんよりと、ますます落ち込んだ伽羅を、少女が慈愛に満ちた目で見つめていた。

「あの、あのね、お兄ちゃん。あたしがいいこと、教えてあげる。あのね、ほんとは街のひとだけって決まってるんだけど、お兄ちゃん可哀相だから、きっと大丈夫だよ。お守り石、ただで貰えるところがあるの。街のひともたくさん、そこに行って、貰ってるんだ。教えてあげようか？　あ、もちろん、神殿にあるのより、ずっとちっちゃなやつなんだけど……」

いたいけな少女の言葉に、記憶の一部が刺激される。

（ちっちゃな、お守り石……？　それも、ただ……？）

つい先ほど、よく似た話を聞いたばかりだ。

（あの神官の話じゃ、ただではなかったはずだけど……）

そう思いながら、ちらりと少女に目を向けた。

伸ばしっぱなしの髪は、きちんと手入れをすればつややかに輝くだろうに、切れ毛や枝毛のせいでぼさぼさだった。

すり切れた木綿の上下に、芭蕉布ではない、一重の上着。見れば草履はずいぶんくたびれており、鼻緒は何度も取り替えられた跡がある。

明らかに、富裕層の生まれでないとわかる、その格好……。明るい笑顔がなければ、みすぼらしい子供としか思えないだろう姿。

（もしかして、売ろうにも売れない小さな欠片は、無料で配っているのか……？）

あり得ない話ではない。

俄然、興味を引かれ、伽羅は少女に問いかけた。

「それは、お兄ちゃんでも貰えるのかな？」

街のひとにだけ、じゃないの？

少女は、小さく首をかしげた。

「んー、んん？　どうだろう……確かに、他所のひとが貰ったって話は聞いたことないけど……」

やはり、街の住人限定の大盤振る舞いらしい――それが本当に、守り石のかけらであったならの話だが。

ひとしきり、考え込んだ後、不意に少女がぱっと顔を上げた。

楽しそうに、焦げ茶の瞳がきらきらと輝いていた。

「そうだ！　お兄ちゃんの分、あたしが貰ってきてあげる！　明日、貰いに行くことになってるの。ようやく貰えるの。それで、ほんとはあたしの友達と、ふたりで貰いに行くはずだったんだけど、友達が急にいらないって言い出したから、一個、余分に貰えるんだ！」

やっと順番が回ってきたんだよ、と弾む声で少女が告げる。

「……順番とか、あるんだ……？」

（つまり、常に配っているわけではない……？）

用心しながら、投げかけた問い――しかし、こちらの意図に気づくことなく、少女は嬉しそうにうなずいた。

「うん！　二カ月に一度しか、お守り石は貰えないの。みんなが欲しがる分全部は、やっぱりないんだって。だから、欲しいひとは、そこに行って、名前を書いて、順番を待つの。うちは

ね、お父さんとお母さんが、最初に貰えるはずだったんだけど、代わりにあたしと妹にくれるようにって、名簿？　の、変更？　をお願いしたんだって。それが時間かかっちゃって、随分遅くなっちゃったんだけど、それがようやく明日なの！　夢みたい……お守り石が貰えるなんて……ほんと、夢みたい……」

うっとりとした目で、少女は微笑む。

見ているだけで、幸せが伝わってくるような、綺麗な笑顔だった。

守り石とは、それだけ心の支えとなるものなのだ——そんなひとたちが、世界の圧倒的多数なのだと突きつけられて、伽羅は一瞬泣きたくなった。

守り石として、一番広く知られているが、聖石の子供石には、ほかにもいろいろな力が宿っている。

薬湯に変え、その力を身体に流し込むこと。

精霊たちの協力を得るためのお礼。

その他諸々——実に用途はさまざまだ。

それは、まさに奇跡の力だ。

なのに、もしかしたら、それを抱いて生まれた者たちこそが、そのありがたみや貴重性を、忘れているのではないのだろうか……？



日々を懸命に生きるこの少女が思うほどに、守り石に感謝したことなど、物心ついて以来一度としてなかったと、自覚した瞬間、心を襲ったのは羞恥だった。

自分のことを不幸だと、思ったことは一度としてなかった。

だが、幸福であるとも思っていなかった。

(恥ずかしいな……)

目の前の、懸命に生きる少女に比べ、自分はどこか、傲慢に生きてきたのだ。

突きつけられた事実が、胸に痛い。

「……お兄ちゃん?」

どうしたの?

ふと気づけば、心配そうに顔を曇らせて、少女が覗き込んでいた。

「ん? いや……君はいい子だな、と思って」

微笑みながら答えると、淡いそばかすの散った顔が、微かに赤くなった。

「そ、そ……んなこと、ないと思うけど……じゃあ、お守り石、あたしのと一緒に貰ってくるってことで、いい?」

「うん、是非、お願いしたいな」

うなずきながら、伽羅は気になったことを口にした。

「でも、そのお友達は、本当にいいの？　その子だって、やっと順番が回ってきたんだろう？」

そう尋ねると、途端に少女は眦をきつくし、つん、と顎を反らした。

「いいの！　あんな馬鹿のことなんて！」

ほんの今まで浮かべていた、あの笑顔はどこへ――と尋ねたくなるような、不機嫌な……否、拗ねた顔。

どうやら、相当お冠らしい。

（喧嘩でもしたかな）

そんな様子も微笑ましく、伽羅はつい口元が綻ぶのを覚えた。

今は馬鹿、馬鹿と貶しているけれど、きっといつもは仲が良いのだろう――少女の口調から、容易く想像できる。

そして、だからこそ、少女は今、心底憤っているのだ……。

「ほんと、もう知らないんだから、あんな馬鹿！　せっかく、小父さんが、貰えるように順番取ってきてくれたっていうのに！　ああいうのを、親の心子知らずって言うんだよ！」

……間違った言葉運びではない……多分。

だが、十歳ぐらいの女の子が口にすると、何とも言えない違和感を覚える言葉ではあった。

（うーん……）

ここは全面的にうなずいておくべきか、それとも事情を聞き出すべきだろうか。

これまで、歳の近い友人というものを持ったことのない伽羅としては、大いに悩むところだった――が。

その決断を下す前に、新たな声が飛び込んできた。

「ひとのこと、馬鹿というやつのほうが馬鹿なんだぞ、この阿呆っ子アイーシャ」

それは、まだ声変わりもすんでいない、少年のもの――。

赤茶の巻き毛に、褐色の肌の――どこかで似たような配色の主を見たような気がする――十二、三の少年が、腹立たしげな顔で、少女の背後に立っていた。

少女――アイーシャが、ビックリした顔で、声のしたほうを振り返る。

「誰が阿呆っ子よ、この馬鹿イランド！　あんたなんか、馬鹿で充分よ！」

怒りに顔を赤く染め、食ってかかるその姿は、傍から見ると可愛いばかりだ。

（ふーん、友達って、男の子だったんだ……）

なるほど、遠慮なく「馬鹿、馬鹿」と言えるはずだ――それが許されることを、アイーシャは信じて疑わないのだろう。

そこには、少年に対する絶対的な信頼がある。

目の前で繰り広げられる、「馬鹿」「阿呆っ子」の応酬を、聞き出したい情報のことも一時忘れて、伽羅は微笑ましい気分で見守っていた。

もっとも、それはそう長い時間のことではなかったが。

いくら「馬鹿」と繰り返しても、柳に風といった体の少年――イランドの態度に、アイーシャが癇癪を爆発させたのだ。

「馬鹿だから馬鹿って言ってるの！　せっかく小父さんが、イランドのためのお守り石、貰えるようにしてくれたっていうのに、いらないだなんて罰当たりなこと言うんだもん！　これが馬鹿じゃなくてなんなのよ!?」

叩きつけられる言葉に、イランドの顔が不機嫌に曇る。

「まーだ、そんなこと言ってんのか！　あんなの、守り石なんかじゃねえよ！　お守りどころか災難呼び込んでる呪いの石じゃねえか！　本当に守り石だったら、ジヤンさんが貰った途端、あんな大怪我したのはどういう理由だよ!?」

イランドの言葉に、伽羅はぴくり、と反応した。

（守り石を貰った途端、大怪我を負った……？）

それは、件の『変死』となにか、関係があるのだろうか――？

詳しい話を聞くために、口を挟もうとしたが、それよりアイーシャの言葉のほうが早かった。

「違うよっ！　お守り石のおかげで、ジヤンさんは命拾いしたんだよっ!!　みんな、みんなそう言ってるんだから！　イランドがひねくれすぎてるんだ！」

憤然たるアイーシャの言い分は、しかしイランドに一蹴された。

「じゃあ、シュラッドさんは？　あの泳ぎの達者なひとが、溺れかけたなんて、青天の霹靂もいいところじゃねえかよ。あとゼラ親方んとこのソイルは？　ジャードは？　みんな、あの石を貰ったあとで、大怪我してるじゃねえかよ！」

偶然と言うには、確かに異様な一致――と言えよう。

（これは、詳しい話を聞く必要があるな）

伽羅がそう思うのと、言い負かされた形になったアイーシャが切れたのは、ほとんど同時のことだった。

「なによ、なによ、なによ！　馬鹿イランドの大馬鹿――っっ！」

顔を真っ赤にして、アイーシャが駆け出した。

恐らくイランドもあとを追いかけるだろうと思い、腰を浮かしかけた伽羅は、しかし少年がそうしようとしないでいるのに気づき、少しばかり意外の念を抱いた。

（てっきり、追いかけるものだと……）

思っていた少年は、腹立たしげな顔で、伽羅を睨みつけていた。

「兄ちゃんもさあ、そんないい身なりしてんだから、お守り石がただで貰えるだなんて与太話につきあってんじゃねえよ。そんなの奇怪しいって、あいつに言ってくれたらよかったんだ……あいつときたら、俺の言うことなんか、聞きやしねえんだから……」

どうやら、おとなしくにアイーシャの話を聞いていたことを非難しているらしい。

なにか手がかりとなる情報はないかと、少女の言葉に口を挟まず、耳を傾けていたのは事実だったから、伽羅はなんと答えたものかと思った。

「う、ん……神殿に来る途中で、財布をスられて落ち込んでたら、あの子が慰めてくれて……そのせいで、お守り石を買えなかったことを話したら、親切にしてくれたんだ。……いい子だね」

恥を承知で、そう打ち明けると、結構世間に揉まれているらしい少年は「間抜けでぇ」とつぶやいた。

ぐさりときた。

しかし、少女のことを「いい子」と言われたことは嬉しかったのか、照れたように、指で鼻を小さく掻いた。

「……あれはお人好しの間抜けっていうんだよ。にしても、抜けてるなあ、兄ちゃん。まさかとは思うけど、あいつの言うこと、真に受けてるわけじゃねえだろうな？　これは親切から言うんだけどよ、ほんと、やめとけよ？　あんな石、貰ったって、絶対いいことねえんだから」

確信をこめた声でそう言うと、少年はくるりと踵を返した。

「そんだけ。世の中、ただより高いもんはないんだぜ」

世間知らずの兄ちゃんに、忠告――。

手をひらひらと振りながら、少年はそのまま歩き出そうとする。

慌てて、伽羅はイランドを呼び止めた。

「ちょっと、待ってくれ！　その話を、もう少し詳しく――」

聞かせてくれ――とは、言葉にならなかった。

不意に立ち上がったせいか、ぐらりと視界が歪んだのだ。

すう、と頭から血が下がっていくのがわかる。

（まず、い……身体が……）

倒れる、と思ったときには、もう視界は真っ暗になっていた。

なにかが……誰かが、倒れる寸前、抱き留めてくれたような気がしたけれど——もう確かめることはできなかった。

5

宿の食堂のテーブルで、セイタマールは困惑に眉宇をひそめていた。
目の前には、自分用の朝食とは別に、まだ半分も片付いていない料理の載った皿が置かれている。
突然わけのわからないことを言い出して、席を立った少年のものだ。
まったくもって、わけがわからない。
セイタマールには、なぜあの少年――伽羅が突然腹を立て、席を立ったのか、全然理解できなかった。
昨夜は戻ってくるのが遅かったため、朝食の席で、聞き込みの成果とも言えない結果を告げたのだ。
嘘はいっさいついていない。
本当に、収穫と呼べる収穫はなかったのだ。

ただ、ひとつだけ気になる話を耳にした――だが、詳しい事情を知る人間が、あいにくいなかったため、今夜また、足を運ぶつもりだった。
伽羅には、それを聞いてから話そうと思っていたのだ。
『そうですか』
と、うなずいたときは、別に怒ってはいなかったと思う。
だが、次に伽羅がつぶやいた言葉には、少々驚かされた。
『……今日は、街で聞き込んだほうがいいかもしれませんね』
なにを言うのかと思った。
伽羅の顔色は、昨日ほどではないとは言え、まだ良好とは言い難いものだったからだ。
（こんな顔色のやつを外に出せるか）
ふらふらして行き倒れるのがオチだ。
だから、それは自分がやると告げたのだが、途端に伽羅は顔を顰めた。
充分に休んだと、鏡を見ていないのかと言いたくなる顔色をしているくせに言い張ってくる。大変な意地っ張りぶりに、セイタマールは矛先を変えてみた。
こんな目立ちすぎる相手と、地道な聞き込みなどできないと――さすがに自分が人目を引く自覚はあるらしい少年は、それでも諦めきれない様子で、『もう少し地味な服を……』などと

言い出してくれる。

全くないわけではないが、よくよく自身のことを把握しているわけではないことが、如実にわかる発言だった。

（温室育ちの花を、書き損じの紙で包むようなものじゃないか……）

俄に頭痛を覚えた。

気配を変えることもできない伽羅が、どんなに質素な服に身を包もうが、違和感を与えまくるだけだと、確かに告げたはずだというのに……どうも、わかっているようで、本当にはわかっていないらしい。

だから、セイタマールなりにわかりやすい譬えで指摘したのだが、伽羅は怪訝そうな顔をするばかりだった。

そんな少年の様子に、彼は思わず、治療院送りにされたという、五人の先任者たちに、深い同情を覚えた。

こんな、中途半端な自覚しかない目立ちまくりと組んで、よくも仕事をする気になったものだ、と。いや、結局懲りた上に怪我までしたから、自分にまでお鉢が回ってきたのだろう、と今更ながらに気づき、ますますイヤーな気分になった。

ともかく、こちらのほうから攻めても、効果は望めないらしいと割り切り、セイタマールは

直球を投げた。
顔色が悪い、と。
せめて今日一日は休むように、と。
しかし、その言葉のなにかが、伽羅の逆鱗に触れてしまったらしい。
憤然として立ち上がると、少年は肩を怒らせたまま、上に取っている部屋に戻ってしまったのである。
そうして、今のこの状況――というわけだ。
本当に、わからない子供だと思う。
大人顔負けの立ち居振る舞いを見せるかと思えば、実際より子供っぽい様子で露店に目を向けては、掏摸の類の関心を引き寄せていることに気づきもしない。
なにより妙なのは、あの怒りの表し方だ。
あれは、慇懃無礼というやつだ――芭蕉の神殿の掌中の玉が、なぜ、あんなにひねくれているのか素直なのかわからない、妙な子供なのだろう。
自分も、神殿で育ったが、どうすれば、あんな風になるのか、いくら考えてもわからない。
那八と芭蕉の違いなのか、そもそもの気性の問題なのか……。
そんなことを、あれこれ考えていたセイタマールは、食堂の女将に声をかけられ、はっと我

に返った。

「こっちの皿、どうしましょう……お下げしますか？」

指し示されたのは、言うまでもなく伽羅が残したそれだった。

「それとも、あとで食べられるように、詰めましょうか？　うちのは、冷めても美味しいんですよ」

半分以上残されて、正直いい気分ではないだろうに、それでも伽羅のことを気遣う様子を見せる女将に礼を述べると同時に、彼は「では、俺の分も一緒に、詰めてもらえますか」と頼み込む。

あの様子では、戻っては来ないだろうし、先ほどの言葉を実行するつもりなら、こちらが食べ終わるより先に、宿を飛び出して行くに違いないからだ。

（無理がきかないと実感すれば、おとなしく休む気にもなるだろう……あんなのを連れていては、どのみち下町のほうには行けそうにないしな）

取りあえず、伽羅の望みに添う方向で、今日のところはつきあってやろうと思い、セイタマールは朝食を弁当に詰め直してもらいながら、伽羅が階段から下りてくるのを待った。

が、しかし、いつまで待っても、少年の細い姿は現れない。

（まさか、部屋で倒れてるんじゃないだろうな）

真っ青とまではいかないが、決して平気そうには見えなかった顔色を思い起こせば、それはあり得ないことではない。

女将から、詰めてもらった包みを受け取って、彼は部屋に戻った――薬湯で間に合うか、それとも医者の手配が必要かを見極めるために。

しかし。

扉を開けた部屋のなかに、伽羅の姿はなかった。

食堂では羽織っていなかった、芭蕉布の上着もない。恐らく財布もないだろう。

（あいつ……裏口から！）

そうと知った瞬間、セイタマールの口から、盛大な舌打ちが洩れた。

「あの……子供っ！」

伽羅が耳にしたら、驚いたに違いない。

なぜなら、その罵倒のつぶやきには、なぞったものではあり得ない、生の感情が宿っていたのだから！

「騙された！」

忌々しい思いで毒づきながら、セイタマールは宿を飛び出した。

あの細く儚げな容姿に。

あの顔色に。

あの名前に。

伽羅――とは、読みを変えれば、伽羅。

沈香のなかでも最上の品――最高の香木にして、同時に極上の意味を持つ。

あの少年が持つ、それら全てに……騙された。

（なにが箱入りだ！　なにが芭蕉の掌中の玉だ！）

遊羽の神官長オサラディーンの言葉は正しかったのだ。

「あんなのはただの暴れん坊で充分だ！」

水の加護が篤いからとか、水気を宿す聖石の子供だからとか、気配に敏感だからだとか……そうしたことも、惑わされた原因に含まれている。

（つまり、おれは未だにあのひとのことを引きずってるってわけだ……）

苦い思いを噛みしめながら、セイタマールは道行く人々のなかに、細い少年の姿を求めて見回した。

四年前、自分が死なせてしまった、美しく儚いひと――ラークラーニ。

（あいつなんざ、綺麗で儚く見えるだけだ！　無駄に綺麗ってのは、ああいうのを言うんだ）

通りには、求めるつややかな黒髪は見いだせない。

ひとをかき分けながら、彼は進んだ。

彼女は大人で、しっかりと未来を見つめ、揺らぐことがなかった。

（それに比べて、あいつと来たら、子供も子供じゃないか。じたばた足掻いて……傍迷惑なやつだよ、全く！）

昨日、興味津々に伽羅が覗いていたあたりの露店を捜してみるが見つからない。

「あー、黒髪の、見た目だけは人形みたいに綺麗な、細っこい小僧を見かけなかったか？」

何人かに尋ねたが、色よい返事はなかった。

水の篤き加護を受けた、真珠の使徒――。

（水の加護は確かに篤いみたいだが、珊瑚や真珠の使徒ってわけじゃないんだから、大丈夫なんだ、よく考えてみれば。第一、使徒でもないんだし！）

海鮮粥の屋台の親父が、ようやく伽羅を見かけたことを教えてくれた。

「それで、あいつはどちらに向かっていた？」

「ああ、あの坊やか。食べたそうな顔してこっち見てたから覚えてるよ。だけど人波に流されちまってねえ。神殿のほうじゃないのかな。いけねえよ、あんな綺麗な子、ひとりで外に出しちゃ。男の子だって、安心できねえんだからよ」

（ひとつ、訂正だ。あいつは綺麗で良かった……おかげで見つけやすい）

黒髪の綺麗な細い小僧――説明が簡単ですむ。

そんなことを思いながら、セイタマールはようやく得た手がかりをもとに、アスカニーリ神殿へと向かう。

聖石やその子供石は、地神神殿の管轄なのだ。

（……いた）

神殿前の広場のベンチに、腰掛けている細い姿――。

倒れてはいなかった――そのことに安堵したが、次の瞬間、怒りが湧いてきた。

行き先も告げず、勝手に宿を抜け出しておいて、暢気にふたりの子供たちと笑いあっている姿を見て、微笑ましいとはとても思えなかった。

（心配するとは思わないのか!?　どこまで自分勝手なんだ！）

苛立ちを抑えきれず、セイタマールは大股に伽羅に近づいていった。

切れ切れに、聞こえてくる子供たちの声。

「……よ、……よ、なによ！　……イ……ドの大馬鹿――っっ！」

花売りらしい少女が、少年に怒鳴りつけるなり、駆け出した。

伽羅が、腰を浮かしかけるが、結局は立たなかったことに、セイタマールはほっとする。

朝以上に、顔色が悪くなっていることに気づいたのだ。

少年が、伽羅になにか言っている。

「兄ちゃんもさあ、……お守り石がただで……与太話につきあって……あいつに……てくれたらよかったんだ……あいつときたら……」

洩れ聞こえてきた言葉に、軽く目を瞠る。

なるほど、と感心した。どう見ても聞き込みをしているようには見えないというのに、しっかり手がかりらしきものには行き当たっている。

（かなりの強運の持ち主であることは確からしいな）

それまで貶す一方だった評価が、好転しかけたのも束の間――。

「う、ん……神殿……途中で、財布をスられて……んでたら、あの子が……そのせいで、お守り石……いい子だね」

（やはり、スられたのか……）

セイタマールはがっくりと肩を落とした。

感心しただけ、尚更損をした気分になる。

怒るのも馬鹿馬鹿しくなり、彼は歩調を緩めた。少年と伽羅の会話は、もうほとんどが聞き取れる。それでも、伽羅がこちらに気づく様子はない。

（本当に、感知能力に長けているのか？　組んでる相手の気配ぐらい読み取れというんだ）

瘴気や念といったものと、人間の気配とは、感じ取る部分が違うのだが……前者に対してほとんど感じ取れないセイタマールは、そんなことは知らず、理不尽な怒りを胸のなかで燃やしていた。

「そんだけ。世の中、ただより高いもんはないんだぜ」

話はすんだとばかりに、少年がくるりと向きをかえるのを見て、伽羅が慌てたような声を上げた。

「ちょっと、待ってくれ！　その話を、もう少し詳しく――」

立ち上がろうとしたのだろう、その身体がぐらりとかしぐのを見て、セイタマールは思わず舌打ちした。

「言わぬことじゃない！」

伽羅、と大きく呼びかけながら、彼は駆け寄った。

間一髪（かんいっぱつ）――。

伽羅の身体を受け止めたときには、深い安堵の息が洩れた。

意識をなくした少年の身体は、驚くほどに軽かった――。

6

ゆさり、ゆさり、ゆさり――。
身体が、揺れている。
一定のリズムで、上下に揺れる動きには、覚えがあった。
いや、よく似た動きに、と言うべきか。
（……？　なんだ、馬に乗ってる……？）
ぼんやりと、浮上しかけた意識で、伽羅は思った。
（乗った覚えはないのに……なぜ……？　いや、違う。馬の……揺れ方じゃ、ない……）
では、なんだろう――考えるが、覚醒しきれていない頭は、うまくものを考えられない。
大体、なぜ自分がいま、揺られているのかがわからない。
懸命に、伽羅はこれまでの記憶を辿った。
朝食の席で、セイタマールに反発して宿を飛び出し、神殿へ向かった。

神殿に陳列された守り石には、異常が見つけられないことに安堵し、あれこれと神官から話を聞いた……そこで、自分が財布を紛失したことに気がついて。

神殿前の広場で、落ち込んでいたら、花売りの少女――アイーシャに声をかけられたのだ。

そうこうする彼女の話に興味を覚え、詳しく聞こうと思ったところに、少女の友達らしい少年が現れた。

彼らから聞いた話には、今回の事件に関係がありそうな要素がいくつも含まれていて……だから、立ち去ろうとした少年を引き留めようと、立ち上がりかけたところで――。

（そうだ、目眩がして……）

それきり、記憶が途絶えていることを考えれば、意識を失ったのは間違いなさそうだった。

だが、そうだとすると、いまのこの状況は……？

そろり、と目を開く。

見えたのは、男性の足と、石畳。首を左に傾げたところで、特徴的な赤い髪が目に飛び込んできた。

（なんだ、どこかに運ばれているのか？　でも誰に……って、こんな赤い髪は、滅多にお目にかかれないはずだから……つまり……ええーっとぉ……？）

状況を、整理してみる。

まず、揺れて……運ばれている身体。

視界に入るのは、男の足と石畳。男の髪は、滅多に見ることのない炎の赤で——どうも、腰に回されているのは、男の腕らしい。

ということは、だ。

「って、ええーっっ!?」

恐慌を来し、伽羅はひっくり返った声で叫んでしまった。

「なんだ、目が覚めたのか」

聞こえてくるのは、セイタマールの声だ——間違いなかった。

「セ、セイ……これは……っっ!?」

「暴れるな、落とされたいのか」

思わず身体をひねろうとした伽羅に、青年の冷ややかな声がかけられた。

声に、確かに怒りが宿っている——なぞったような、偽物のそれとは違う、それが。

知らず、身を強ばらせてしまうほど、強烈な怒気に、伽羅はぴたりと動きを止めた。今の青年なら、必ず有言実行することが、確信できたのだ。

恐ろしい。

「お、落とすのではなく、下ろしていただけるとありがたいんですが」

肩から。

そう……この格好はあまりにあまりだと思うのだ。

よりにもよって、セイタマールの肩に、荷物よろしく担ぎ上げられて運ばれているというのは！

しかし、伽羅の願いは、聞き届けられることはなかった。

「却下」

一言で切り捨て、セイタマールは歩きつづける。

「ちょっ！　セイ！　聞く耳ぐらい持ってください！　傍目にどう映るか、わかってるんですか!?　あなた、これじゃあ人さらいですよ!?　叫びますよ！」

（下ろせって、言ってるだろうがぁ！）

拳でぽかぽか彼の背中をたたくが、鍛え上げられた筋肉に覆われた身体は、びくともしない。

それが、また悔しい。

（ちょっと、男らしい大きな身体してるからって……！）

劣等感を刺激され、羞恥も手伝い、伽羅は泣きたくなった。

そんなこちらの心中を知ってか知らずか、セイタマールはあくまでおとなしくならない伽羅

に、底冷えするような低い声で、とんでもないことを告げてきた。
「荷物扱いが不服なら、どこかの姫君のように抱きかかえて運んでやろうか？　それとも、子供らしく、背負われるほうがいいか？　好きなほうを選ぶといい。それぐらいは好きにさせてやってもいい」
提示された選択肢は、お姫様だっこか、負(おんぶ)――恥ずかしすぎる。
「……だから、下ろしてくださいと」
「却下。二度も言わせるな。そんな状態のお前が、無事に宿まで戻れるものか。自分の具合が悪いことにも気づかないような子供(ガキ)は、大人が世話するしかないんだよ」
身も蓋もない言い方だったが、実際止められたのを無視して宿を抜け出し、挙句(あげく)に出先で倒れてしまった伽羅は、申し開きできない。
「いえ、ですが……」
言いかける伽羅に、セイタマールは最後通達とばかりに、恐ろしい言葉を投げかけてきた。
「あまりうるさいようだと、本当に荷物にして勝手に運ぶぞ」
気絶させるぞ――と言外に告げられ、伽羅はついに抵抗を諦(あきら)めた。
ただの脅(おど)し文句ではない響(ひび)きが、青年の声には宿っていたのだ。
「……我(わ)が儘(まま)を言いました……」

「わかればいいんだ」
答えるセイタマールの口調は、どこか偉そうで、伽羅はますます悔しくなった。
なにやら、主導権を奪われてしまったような気がした。

宿に戻るなり、伽羅は寝台に押し込められた。
いくら、もう大丈夫だからと言っても、取り合ってくれない赤毛の青年は、「戻ってきたとき、起き上がってたら、強制的に休ませるぞ」と、脅しでしかない言葉を投げつけ、部屋から出て行った。
その意味するところが、わからないはずもなく、伽羅はおとなしく寝台に横になり、ふう、と息をついた。
(失敗した……)
体調不良は珍しいことではなかったから、どこまでなら大丈夫かを、見極め損ねた。
理由はわかっている。
これが最後の機会だと、気負いすぎてしまったのだ。多少の無理なら気力で持ちこたえられ

ると過信して、結局倒れてしまったのだから、無様としか言いようがない。
こんなことだから、五人も治療院送りにしてしまうのだ。
セイタマールもきっと、呆れたことだろう——そう思うと、気が重くなった。
終始、怒りの波動を放っていた青年のことを思い出すと、申し訳なくなってしまう。今朝見せたような、上っ面だけの『気遣い』ではない、本当に自分を心配してくれたからこそ、生まれた感情であることを、感じ取れてしまったから。
あんな風に、騙すような形で、出かけるべきではなかった。
できる限り、言葉を尽くし……ても、彼の場合、聞き入れてくれたかどうかは甚だ疑問だが、せめて「出て行く」宣言ぐらいはしてから飛び出すべきだった。
「いや、その場合、問答無用で止められた……か？」
荷物扱いでお持ち帰りされている間に感じた、圧倒的な迫力を思うと、その可能性は高いかもしれない。
「でも、そうすると、神殿の守り石のことは調べられなかったわけだし……全く収穫がなかったわけでも……」
と、もごもごとつぶやいているところへ、セイタマールが戻って来た。
「なにをぶつぶつ言ってるんだ？」

声につられ、そちらを振り向いた伽羅は、青年がなんのために部屋を出て行ったのかを一瞬で悟った。

彼の手には、湯気の立つ椀を載せた盆があった。

寝台のそばの小机に置かれたそれには、椀によそわれた粥と、数種の薬味が盛られた小皿が載っている。

「食えるようなら、食ったほうがいい。お前、朝食も半分以上残していただろう」

言いながら、セイタマールは少し離れた場所にあった椅子を引き寄せ、弁当包みを開け始める。

「はあ。ありがとうございます」

素直に礼を口にして、伽羅は匙を手に取った。

しばし、粥を啜る音と、ものを咀嚼する音だけが、室内を満たした。

重苦しい沈黙ではなかったが、だからといって、安らげるようなものでもなく、粥を食べ終えてしまうと、伽羅はどうしたものかと内心困った。

まるでそれを待っていたかのように、盆の上に、新たな椀が置かれる。湯気は出ているが、お代わりの粥ではない。

血を思わせるような、真紅の液体が、椀の半ばまで注がれていた。

「薬湯……？　あなたが作ってくれたんですか？」
あなたの、子供石で――？
聖石の使徒や子供が持つ、特技のひとつに、石に宿る力をそのまま溶かした薬湯作りというものがある。
石の種類や大きさ、宿る力によって効能はさまざまだが、薬草を煎じたものより遙かに効果は大きい。
「……色がどぎついようなら、別の石で作り直すが……」
色合いに怯んでいると思ったのか、そんなことを言うセイタマールに、伽羅は「いいえ」とかぶりをふった。
「いえ、大丈夫です。いただきます」
迷うことなく、口をつける。
わずかにとろみのある液体が、するりと喉をすべり落ちる。
嗜好品の茶のような旨味はないが、とても温かくなる……そんな味がした。

「少しは落ち着いたか？」

薬湯を飲んだあと、しばらくしてからかけられた声に、伽羅は素直にうなずいた。

セイタマールが作ってくれた薬湯は、澄んだ水の気と、浄化の炎の気という、全く相反するふたつの気を内包しながら、なぜか矛盾なく解け合った力に満ちたもので、念に晒され疲弊していた心身を、充分に癒してくれた。

（ああ……こいつは……）

それだけで、青年が抱いて生まれてきた聖石がなにか、わかってしまった。

なぜ、最後の機会という仕事に、組む相手として彼が選ばれたのかも。

（でも、きっとこいつは嫌がるだろうな）

目に見えるようだ――なので、そのことには触れないことにした。

いずれ、ばれてしまうとしても、その前に彼を煩わせたくない……というのは建前で、そのせいで早々に「お断り」を入れられてはたまらないというのが本音だ。

「ありがとうございました。おかげさまで、元気が出ました」

先ほどまで身体中を這い回るように感じていた疲労感と気持ち悪さは、綺麗に払拭されている。

素晴らしい効き目だ。

「そうか」
盆を階下に戻して来たセイタマールは、さしたる感慨もなさそうにうなずき、しかしすぐに釘を刺してきた。
「だが、元気が出たからと言って、また出かけるのはなしだぞ。薬湯はあくまで補佐であって、身体を癒すのは、充分な休息なんだからな」
つまり、今日一日はどうあっても寝台から出るな、ということだろう。
しかし、これには素直にうなずけない伽羅だった。
「は、あ……」
だもので、つい返事が曖昧なものになってしまう。
ぎろり、とセイタマールが険しい目で睨みつけてきた。
「まさか、懲りもせず、同じことをしでかそうとか、思っているわけではないよな？」
「いえ、その……」
その通りです、とはさすがに、こんなセイタマールを前にして言えることではなかった。
だが、体調が戻った以上、じっとしてはいられない。
「決して、もう無理はしませんから……」
「却下。三度も言わせたな。あれだけ無茶をしたやつの、そんな言葉が信じられると思うの

か？　思えるとしたら、相当めでたい頭の持ち主だと認識するぞ。大体、お前は鏡で自分の顔色を見なかったのか？　顔色が悪いことにも気づかなかったとは、言うなよ？」

かなり……結構、ひどいことを言われている気がするのは――多分気のせいではない。

伽羅は、ふっと息をつく。

「すみません……あの程度は修行中は珍しくもないことだったので……過信していたことは認めます」

そう言うと、セイタマールは妙なことを聞いた、と言わんばかりの顔になった。

「それほど過酷な修行を、日常的に芭蕉のアスカニーリ神殿は繰り返させるのか？」

だとしたら、問題だ。

考え込む様子の青年の瞳には、懸念の色があった。

（あ、誤解してるな）

と、すぐにわかったので、伽羅は慌てて説明した。

「違いますよ。体調無視のしごきだとかではありません。感知能力の強い者限定の修行です。瘴気や強い念に、引きずられたり呑み込まれたりしないよう、瘴気に耐性をつけるために、日頃から触れさせられるんです。浄化不可能な瘴気を宿した『封じモノ』が、神殿には集められていますから、それらを用いて」

感知能力者は、常人にはない第六の感覚でもって、瘴気や念といったものを察知し、そこに宿る意味を読み取ることができる代わりに、それらに引きずられやすいという欠点も併せ持っているのだ。

それを防ぐために、神殿は彼らに耐性をつけるための修行を受けさせる。

特に鋭い感覚を持つ伽羅は、幼いころから数え切れないほどの回数をこなしてきたため、体調不良は『当たり前』状態になってしまったぐらいなのだ。

そのあたりのことを告げると、セイタマールは今度は呆れかえった顔になった。

「それは、本末転倒と言わないか？」

（確かに）

言われてみれば、その通りだ。

だが、そこまでしなければならない事情というものが、伽羅には確かにあるのだ。

「けれど、その修行のおかげで、そうそうのことでは揺らがない耐性をつけることができましたから……」

苦笑混じりに答えると、セイタマールがまた考え込む顔になった。

「それは……つまり、それだけ耐性があるにも拘わらず、お前が体調を崩すほどの歪みが、この浮瞳にはある、ということか？」

思いがけないことを指摘され、伽羅は知らず目を瞠った。

（そういえば……そういうことになる、のか……？）

この街に入って以来、崩れた体調――だが、それはどれかひとつと特定できるようなものではなく、港町であるがゆえに、集ってしまった有象無象の念や瘴気のせいだと思っていた。

だが……そうでなかったとしたら？

集ったのではなく、隠されたなにかに引き寄せられたのだとしたら？　あるいは、大きな塊を砕いた欠片がばらまかれたのだとしたら？

無視することは出来ない仮定だった。

（確かめなければ……！）

思い立ったが吉日――とばかりに、寝台から起き上がろうとした伽羅の額が、がしり、と大きな手で摑まれたのは次の瞬間のこと。

怒りをたたえた、獰猛な獣のような目が、伽羅を見下ろしていた。

「あ……」

（しまった）

思っても、もう遅い。

「四度目を、言わせるつもりか？　言ってもいいが、その場合――」

思わせぶりに口角をつり上げ、セイタマールは迫力満点の低い声でささやいた。
「麻袋に詰め込んで、芭蕉行きの船に投げ込んでやるぞ」

7

日が暮れて、間もなくのころ。
夕食を取るために集まった客で、宿の食堂は賑わっていた。
昼間はともかく、夜ともなれば酒も出るため、客のなかには、すでに顔を赤くしている者もいる。
空いている席を探しながら、伽羅は階段を下りる。
朝食はろくに食べず、昼食は粥だったため、かなりの空腹感がある――セイタマールの薬湯がなければ、ここまで回復できたかどうかは不明だが。
あの後、「本気」と顔に書いたセイタマールに、伽羅は必死に訴えたのだ――絶対に無理はしないから、どうか外に出ることを許してほしい、と。
その理由は、ただひとつ。
神殿前の広場で出会った、アイーシャとイランドから、詳しい話を聞くためだ。

あのふたりは、絶対に今回の件に関わる情報を持っている。
だのに、肝心なときに、自分は貧血などで意識を失い、彼らの連絡先さえ聞き出せないまま、セイタマールに連れ帰られてしまったのだ。
『どうしても、見つけなければならないんです！』
必死に頼みこみ、ふたりのことも話して、何とか外出の許可を貰おうとした。
のに、だ。
あの赤毛の青年は、無情にも「四度目……」と、恐ろしすぎる呪文を口にしたのだ。
『で、ですが……！』
怯みつつも――その時点で、どちらの立場が強いのかは明白だったが――必死に食らいついた伽羅に、しかし、セイタマールは意地の悪い爆弾を落としてくれたのだ。
『あの少年の連絡先なら聞いてある……人攫いと思われては堪らないからな、お前はおれの連れだと説明した上で、聞きたいことがあるから、明日会いたいと言って、約束は取り付けてある。一緒について行くから、とにかく今日のところは休んでおけ』
あまりにもあっさりと告げられた内容に、伽羅は半ば呆然としてしまった。
なぜ、どうして――疑問ばかりが脳裏を埋めた。
だが、セイタマールはそんな伽羅の様子に頓着することなく、

『気がかりがそれだけなら、おとなしく寝ていられるな？』

と言い残し、自分はひとりでさっさと出かけてしまったのだ。

『そうそう。お前が勝手に出かけたりしないよう、女将には頼んでおくからな』

そうしっかり釘を刺した上で！

仕方なく、伽羅は午後を、寝台の上で過ごすことになったのだが、苦痛ではなかった。薬湯のもたらす効果か、いつの間にかぐっすり眠っていたからだ。

そうして——目覚めた時には、すでに陽は暮れており、起き上がると同時に覚えた空腹感に、着替えて階下に降りてきたというわけだ。

「……にしても、混んでるな」

ひと通り見回したが、空いている席は見あたらない。

相席で構わなければ、幾つかはあるが、大抵酒気に顔を赤らめた客がついているため、近づきたいとは思えない。

そのときだった、客に料理を運んでいた女将が、伽羅に気づいて声をかけてきたのは。

「坊ちゃん、もう具合のほうはよろしいんですか？」

（坊ちゃん……）

引っかからないと言えば嘘になる呼びかけに、けれど伽羅はにこやかな笑顔で応じた。

「おかげさまで……昼は、わざわざお粥をありがとうございました」
「どういたしまして。お連れの方から、夜も頼まれましたんで、もう少ししたら持って行こうと思ってたんですけど、どうなさいます？」
食堂の混みようを見て、伽羅は少し考えた。
酒の入った客と相席するぐらいなら、部屋でひとりで食べたほうがましだろうか。だが、手がかりとなる情報は、どこに転がっているかわからないのだ。機会をみすみす逃すのも馬鹿らしい。
「いえ、ひとりで食べるのはちょっと……」
語尾を濁すと、女将は納得した顔で「確かにねえ」とうなずいた。
「少し待っててくださったら、席をご用意できますよ。相席になっちゃいますけど、お酒は召さない方なんで……」
「お願いします」
そう言って、食堂に下りたときのことだ。
扉が開いて、客がひとり入ってきた。
かっちりした鞄を持った、なかなか身なりのいい中年の男だった。どうやら馴染みの客らしく、女将が早速声をかける。

「リッカーさん、久しぶりじゃないか」
「ああ、女将。今回も泊めてもらうよ。まあ、あまり長くはないだろうけどね」
「ははあ、さてはあまりいい石が見つからなかったんだろう？　リワンダさんは注文が厳しいからねえ、そろそろ売りつける石も尽きてきたんじゃないのかい？」
女将の口から出た名前に、伽羅は思わず目を瞠った。
（リワンダさん……注文が厳しい……石……？）
まさか、こんなところで、その名を耳にするとは想像すらしていなかっただけに、驚きを禁じ得ない。
さらにもうひとつ、驚くべきことに――。
（あのリッカーと呼ばれた男の持ってる鞄……中に聖石の子供石が詰まってる）
見なくともわかる――ひとつやふたつではない、さまざまな守護の波動が感じ取れるのだから。
神殿で見たものより、強い。必ずしも石の大きさと宿る力は比例しないが、一般的に出回っているものは、その傾向にある。
つまり、あの鞄に詰められているのは、神殿の購買所に並んでいたものより大粒の石だということだ。

伽羅は不審に思われないよう気をつけながら、女将と男の会話に耳をそばだてた。
そして、男がこの宿に泊まること、荷物を置いたらすぐに食事に下りてくることを知ると、忙しく立ち回る女将にそっと頼み込んだ。
「あのリッカーって方と隣の席にしてもらえませんか？　お守り石を扱ってらっしゃるって聞こえたから……欲しい石があるもので……」
街で倒れたことを知っている女将は、すぐにうなずいてくれた。
病避けの石でも欲しがっているのだと思ったのだろう。
おかげですんなりと、伽羅はリッカーと知り合うことができた。

「なに、守り石が欲しいんだって？　神殿には行かなかったのかい？」
リッカーは、食後の茶をすすりながら、まずそう問いかけてきた。
当然の疑問だ。
守り石は本来、神殿が独占しており、その関係者以外による売買は、厳しく取り締まれているのだから。リッカーは、きちんと神殿から許可を与えられて活動している守石商だ。そうで

なければ、宿の食堂などで、石を話題にしたりはしない。

ただ、その守石商の存在が、一般に広く知られているかといえば、答えは否だ。

つまり、伽羅のような子供が、神殿ではなく、リッカーから石を買いたがるというのはおかしいのである。

「行きましたけど、欲しい石がなかったんです。それで……昔、家に来ていた守石商の方が、珍しい石をいろいろ持ってたのを思い出して、もしかしたらリッカーさんならお持ちじゃないかな、と……」

自分の容姿が、良家の子息然としていることを、伽羅は最大限に利用して、そう答えた。

守石商を屋敷に呼びつけることができるのは、かなりの経済力と地位を持つ者に限られるからだ。そうした家の子供なら、守石商の存在を知っていてもおかしくはない。

「そんなに珍しい石を探しているのかい？」

どうやら一応納得したらしいリッカーが尋ねてくるのに、「珍しいかどうかはわからないんですが」と前置きして、伽羅はその石の名を告げた。

「天眼石の黒と赤をひとつずつ欲しいんです」

リッカーの双眸が、驚いたように見開かれた。

「黒と赤の天眼石……とは、また珍しいものを欲しがる子だね。いや、おかしくはないか……

これまで、持っていなかったのかい？」

そんな彼の態度と言葉に、伽羅はリッカーに対する評価を上げた。

天眼石は、災いから持ち主を守る石と言われているが、特に黒と赤のそれには、特別な力があるのだ。

黒天眼石は死者からの、赤天眼石は生者からの『負の念』を退けるという力が。

リッカーはそのことを、ちゃんと知っているのだ。

（ああ、きちんと石のことを勉強してるひとだな）

そう思いながら、伽羅はため息混じりに答えた。

「持ってはいたんですが、以前事故に巻き込まれたときにふたつとも砕けてしまって……それから立ち寄った街の神殿を訪ねては探しているんですけど、見つからなくて……」

納得顔で、リッカーがうなずく。

「確かにねえ、このあたりでは珍しい石だものねえ。わたしも生憎、持ち合わせはないな。芭蕉あたりなら見つかるとは思うんだが……」

そうですか、と肩を落として見せた伽羅は、ふと思い出したように、問いを口にした。

「あの、先ほどリワンダさんという方のこと、話してらっしゃいましたよね？　守り石の加工をなさってると街で聞いたんですけど、その方なら、もしかしてお持ちなのではないでしょう

か？」

藁にも縋るといった風情で尋ねた伽羅に、リッカーはかぶりをふった。

「お持ちだとしても、譲ってはくれないだろう。あのひとが、珍しい石を求められるのは、商いとは別の、純粋な道楽だからね」

気の毒そうにリッカーが告げるのに、伽羅は落胆しきった顔で俯いた。

そんな伽羅を慰めるように、リッカーはいろいろな話題を持ち出してきた。初めは悄然としていた伽羅が、少しずつ笑みを零すようになるまで、彼はずっとつきあってくれた。

そして、部屋に引き上げるころには、すっかり親しくなった彼は、滞在中、機会があれば、一緒に食事しようと誘ってきた。

「よろこんで」

と伽羅はうなずいた。

もちろんそのときは、セイタマールと一緒に行くつもりだった――。

8

順調にことが運んだのか、あるいは伽羅のことを心配してか、セイタマールはその夜、深更の前に戻ってきた。

出かける前に、「眠っていろ」とは言われたものの、新たに集まった情報もあり、今夜は何としても起きて待っているつもりだった伽羅は、笑顔で相手を出迎えた。

「お帰りなさい」

そう声をかけ、早速成果を尋ねようとしたところ、赤毛の青年の不機嫌そうな眼差しとぶつかった。

「セイ……？」

どうかしましたか？

宿も抜け出さなかったし、食事もちゃんと摂った。彼の機嫌を損ねるような真似はした覚えがないだけに、伽羅は困惑せずにはいられなかった。

「……女将から聞いた」

ぼそりとつぶやく声は、聞いているだけで胸を圧迫されそうになる、地を這うような低いものだった。

「リッカーという男に、ずいぶん気に入られたらしいな」

「ああ」

と、伽羅は納得した——なぜ、相手が不機嫌なのかは考えることなく。

「アーカイド・リワンダと取り引きのある守石商だと聞こえてきたので、女将に頼んで引き合わせてもらったんです」

おかげで、興味深いことがわかったんですよ——。

そう続けた伽羅に、セイタマールは未だきつい眼差しを向けたまま、やはり固い声で問いを重ねた。

「……食事に誘われていたと聞いたが？」

（女将、見ていたのか）

結構めざといな、と思いながらも、それだけだった。

「ええ。またアーカイド・リワンダについて知りたいことが出てきたら、それにかこつけて、あれこれ話が聞き出せるかな、と思いましたから」

けろりとして答えた伽羅に、セイタマールは何とも形容し難い眼差しを向けたあと、心底呆れたようなため息をついた。

「……いけませんでしたか？」

なぜ、こんな態度を取られるのか、皆目見当がつかない伽羅は、きょとんとして聞き返した。

「お前に危機感というものは……いや、いい。ただし、そのときは俺がついていくからな」

何度もかぶりをふったあと、諦めたような声で告げられた言葉は、しかし伽羅にとっては言われるまでもないことだった。

「ええ、最初からそのつもりでした。話を聞き出すにしても、わたしばかりが水を向けていたら、不審がられないとも限りませんし。わたしみたいな子供が、興味を示すような話題でない時もあるでしょうから」

そう答えると、セイタマールは今度は頭を抱え込んだ。

（どうしたんだろう？）

首を傾げた伽羅に、しかし青年はすぐに顔をあげ、「なんでもない」と手を振った。

「……それで、どんな興味深いことがわかったって？」

ようやく本題に移ったことで、伽羅は瞳を輝かせ、リッカーとのやりとりから引き出した情

報を、嬉々として話し始めたのである。

（どんな育て方をすれば、こんな生き物が出来上がるんだ……？）

目の前で、また考えこんでしまった少年を見つめながら、セイタマールはもう何度目になるかもわからないため息を洩らした。

先入観とは恐ろしいもので、彼が伽羅に抱いた『妙な目をした子供』というそれは、つい今朝まで、心の一部にこびりつき、よりよく見ようという意志を阻害していた。

大人に囲まれて育った子供らしい、大人びた卒のない言動は、セイタマールの関心を削ぐに充分で、だから実のところ、この少年のためになにかしてやろうというつもりはなくなっていた。

適当に、彼の気が済むまでつきあってやって、遊羽に戻るなり、やはり組めないと、オサラディーンに告げるつもりだった。

わけのわからない癇癪を起こし、彼が宿を飛び出すまでは。

呆れるやら腹が立つやらで、「結局子供じゃないか」という結論に達した途端、遠慮するの

も馬鹿馬鹿しくなり、自分の精神衛生のため、相手の言い分より、自分のそれを優先させることに決めた。

どうせ今回限りの仲なのだから、嫌われようが怖がられようが、構うものかと思ったのだ。

そうして、伽羅の抗議を柳に風と聞き流し、暴れる相手を脅しつけて、肩に担いで宿に連れ帰ったあと、少年の態度に、変化が見られた。

怒気を隠さない自分の態度に、確かにびくりと身を震わせたりもするのだが、格段に素直になった。怖がらせすぎたかとも思ったが、薬湯を差し出した自分に礼を言うその瞳に、怯えの色はなく、またその声には素直な感謝の響きが宿っていた。

おや、と思った。

そうして、改めて観察してみると、大人びた態度は擬態にすぎず、その奥には年齢相応の子供らしい反応が見え隠れしていることに気がついた。

敬語を崩すことはなかったが、それは最初に感じたような、身を鎧うためのものではなく――慇懃無礼という攻撃には用いているようだが――ごく自然に使っているものだとわかったから、もう違和感は覚えなかった。

意識を失う寸前に、知り合った少女と少年のことを思い出し、寝台から飛び起きようとした伽羅の様子は、どこからどうみても、年相応の逸りがちな少年でしかなく、『子供の皮を被っ

た大人』などでは決してなかった。

自分はなにを見ていたのかと思った。先入観に、完全に目隠しされていたことを、認めざるを得なかった。

まだまだ未熟なのだと、こっそり自嘲し、「今回限り」というのは変わらなかったが、一緒にいる間は、力を惜しまず協力しよう、とそう思った。

だから、今夜は昨夜より積極的に、手がかりになりそうな話を、酒場を梯子してでも集めるつもりだった。知り合った男から、『噂に詳しい友人』を呼び出してもらう約束はしてあったが、それ以外でも拾えるだけ拾うつもりで宿を出た。

予想外に早く帰ったのは、自分では判断しかねる情報が手に入ったからだ。感知能力がほとんどなく、さらには『聖石』に関する深い知識も持ち合わせていないセイタマールには——それでも下位神官よりは詳しいが——それらをどう整理していいのか、わからなかった。

そうした分野は、伽羅が詳しい。

眠っていろ、と言い置いてきたため、寝ついている可能性が高いが、もしまだ起きているようなら、伝えて考えを聞いておきたい。

そう思い、宿に戻ったセイタマールだったのだが——。

女将に呼び止められ、親切な忠告を受けたときには唖然とした。

食堂に下りてきた伽羅が、ちょうど訪れた守石商の男と、夕食をともにしたというのだ。しかも、その守石商は、昼間の子供たちの話に出ていたアーカイド・リワンダとも繋がりがあるのだという。まあ、だからこそ、伽羅は近づいたのだろうが……それにしても。

（昼間と言い、なんて『引き』の強さだ）

と、思わずにはいられなかった。

向こうから情報が転がってくるその強運だけで、伽羅は充分調査員としての仕事は務まりそうだと、本気で思った。

呆れていいのか、感心すべきなのか……。

思わず苦笑したセイタマールだが、女将が気遣わしげな顔をしているのに気づき、内心首をかしげた。

『なにか……？』

まさか、またしてもどこかへ出かけたのではなかろうな——ちらりと浮かんだ考えは、幸い杞憂に終わったが、女将が告げた内容には、眉宇を顰めずにはいられなかった。

『いえね、リッカーさんのことは、心配いらないんですよ……あのひとは根っからの女好きですからね。けど、あんな綺麗な坊ちゃんが、あんなに無邪気に笑うのを見たら、妙な気を起こす輩が出ないとも限りません。なるべく、目を離さないで、気をつけてあげたほうがいいです

よ』

もっともな言葉に、うなずきはしたものの、そのときは、さして気にしていなかった。

その『無邪気な笑顔』とやらが、彼の演技によるものだと確信していたからだ。

階段を上りながら、『それにしても、いくら手がかりが得られそうだからって、ひとりで動くなんて、傍からどう見えるかわかっているのか、あいつは』と、ついぼやいた瞬間、ひやりとイヤな予感を覚えた。

無邪気な仕種や表情は演技だとしても――それが、周囲にどのような影響を及ぼすかという自覚についてはどうだろう、という疑問が浮かんだせいだった。

（まさか、その手の危機感を持っていないんじゃないだろうな……？）

さすがにそんなことはあるまいと思いはしたが、一度浮かんだ疑問を放っておくのも落ち着かず、杞憂であることを願いながら、セイタマールは伽羅に夕食のことを問いただしたのである。

その、結果たるや――。

（嘘、だろう……）

冗談だと、言ってほしかった。

しかし、伽羅はこちらの懸念に気づいた様子もなく、きょとんとした顔で。

「……いけませんでしたか？」

と、聞き返してきたのだ。

その瞬間、強烈な脱力感に襲われ、セイタマールはがっくりと肩を落とした。

いくつもの顔を演じ分ける強かさを持つ伽羅という少年は、しかし、自分の容姿が周囲に及ぼす影響というものに対して、まったく自覚を持っていないのだ。

こうだから、少年を外に出したくないのか、外に出したくないからこう育てたのか……芭蕉の神殿が、どんなつもりなのか、一度聞きたいものだと、心から思った――。

リッカーから聞いた話では、アーカイド・リワンダという人物は、商売の上では強引な手口を使うこともない、善良な性格で知られている、ということだった。

「貴族や富商階級から注文を受けることもあって、そのための石を入手するのに、数人の守石商とのつきあいもあるそうですが、特定の石に関して、大量に買い付けているそうなんです」

趣味の道楽では片付かないほどに――。

そのことを話すと、すぐにぴんと来たらしいセイタマールが「黒の守り石か？」と尋ねてき

た。

「そう思いますよね。いくら欠片石とは言っても、ただで配るほどの量が、定期的に出るのはおかしな話ですから。確かに黒い石を最も大量に求めているらしいんですが、実は他にも二種……正確には、三色の石を集められるだけ集めているそうです」

「三色？」

「ええ。黄色と赤と緑のもの、特に黄色い石は大粒であれば、種類を問わずに求めているそうです」

守り石にあって、その色彩には少なからぬ意味がある。

考えこむ顔で、セイタマールがつぶやいた。

「黄色は、確か『土』の属性だったな」

こくり、と伽羅はうなずく。

「そして、赤と緑は『火』の属性です」

黒は――『水』

リワンダはなぜ、その四色の石にこだわるのか――こだわらねばならない理由があるとすれば、それは何なのか。

「リッカーさんには、特に大粒の石を探して欲しいと言っているそうです。あのひとは、芭蕉

にまでツテがあって、珍しい……力の強い石も手に入れられるそうなので」
「天眼石は持っていなかったんじゃなかったか？」
本当に、それほどの実力があるのか――？
疑わしげなセイタマールの様子に、伽羅は苦笑した。
「天眼石は、ある意味特殊すぎる石ですから。わたしたちのように、念や瘴気を身近に感じざるを得ない人間や、恨みを買いすぎて命の危険に晒されている立場にある者ぐらいにしか需要はありません。それでも、石の持つ力を、リッカーさんは知っていました。口だけのひとではありませんよ」
実際、リッカーの手持ちの石は、かなり上質なものが揃っていた――実際に見たわけではないが、鞄ごしに伝わってきた波動から、それははっきりしている。
「その四色……いえ、三属性にこだわるからには、絶対に理由があると思うんです。なにかを活性化させるためか、逆になにかを封じるためか……」
活性化させるのが目的だとしたら、『火』と『土』が当てはまる。
――火は土を生ず、と言う。
赤と緑の石を、黄色の石のそばに配すれば、土の属性を持つ黄色の石は、その力を増す。
逆に封じる場合――ふたつ、考えられる。

すなわち、水剋火、土剋水……だ。

ただし、その場合、三属性を揃えなければならない理由がわからない。

「すべてが当てはまるのは……『火』で『土』の力を増幅し、その『土』の力で『水』を封じる……？　だが、封じるための『水』を大量に求める理由は何だろう……？」

そして、四色の石のなかで、黒い石だけが、欠片石として放出されるのは……？

考えこんでしまった伽羅の黒髪を、不意にセイタマールががしがしとかき乱した。

「……っ、セイ……？」

「揃ってもいない札を深読みしても意味はないぞ？　合う符号だけで無理矢理組み立てて、それが先入観になることだってある」

焦るな。

諭すような青年の声に、伽羅は自分が逸っていたことを自覚する。

「そうですね……まだ、あなたの話も、あの子たちの話も聞いていないのに……」

情報は、集められるだけ集めるべきだ。

そのなかから、必要と思われるものをすくい上げ、組み立てる――そう、足りない材料をいくら組み上げても、形あるものを作り上げることはできないのだ。

（焦って……るんだろうな。失敗できない仕事だからってだけじゃなく、自覚できない内に体

調まで崩させたこの街を包む気が何なのかわからなくて……）

こんなことは初めてだった。

だからこそ、不安も覚える。その不安を消すために、一刻も早い解決を望み――先走っていたのでは話にならない。

「すみません、セイ。ひとつのことに執拗にこだわるべき時ではありませんでした。この件は、置いておきますね」

ため息まじりにそう言うと、セイタマールは小さくうなずいた。

笑顔ではないが、仏頂面というわけでもない。もちろん、先ほどまで見せていた、呆れ返ったと言わんばかりのそれでも。

そして、感情の上っ面をなぞるような、あの不自然な気配は、いまはもうない。

（怒らせたときは、心底恐ろしかったけど……あれから、だよな。うん、このほうがいいな……怖かったりわけがわからなかったりはするけど、こっちのほうが、落ち着く）

セイタマールの変化を、好ましいものと受け取っていることを自覚しながら、伽羅は知らずに微笑んだ。

青年が、また、深い息をついた。

「……お前、どうでもいいが、あまり外ではそんな顔はするなよ」

まったく、これだから箱入りは――。

嘆かわしげにぼやく青年の言葉は、伽羅には相変わらず意味不明だったため、思ったばかりのことに、小さな訂正を入れた。

(もう少し、わかりやすいひとだったら、よかったんだけどな)

と――。

9

翌朝――イランドとの約束より半時ほど早い時刻、伽羅とセイタマールの二人は、浮曄の北東部に位置する高級住宅街を歩いていた。

街の実力者たちの屋敷が並ぶなか、ひときわ広い敷地を誇る建物がある――いや、正確には高く張り巡らされた石塀のつながりが。

この塀の向こうに、アーカイド・リワンダの屋敷があるのだ。

大人が飛び上がっても、指をかけることもできないほど高い壁を、伽羅はただじっと見つめた。

その漆黒の双眸は、塀を見ながら、しかしもっと別のものを見透かそうとしている。

意識を澄ませ、塀の向うがわの気配を、探り、読み取る。

屋敷のいたるところから、守護の力の波動が伝わってくる。

リワンダが『道楽』で集めたという珍しい守り石だろう。

（なにが道楽だ……）

忌々しい思いで、伽羅は舌打ちする。

行儀が悪いことはわかっているが、それでも苛立ちは収まらない。

「ひとの祈りの結晶を、目くらましなんかに使ってくれるとは……」

腹立たしい、などという言葉では追いつかない。

「やはり、なにか隠してありそうなのか？」

その手の探索には、まるで役に立たないセイタマールの問いかけに、伽羅はこくりとうなずいた。

「さすが、金に糸目をつけずに買い漁っただけのことはあります。かなり力の強い石ばかり揃ってる……これじゃ、奥になにかを隠してるって言いふらしてるようなものなのに……浮曄の神殿はなにをしてるんだ!?　使徒のひとりやふたり、いないこともないだろうに！」

口調がきつくなってしまうのは仕方ない。

これほど怪しい気配を纏った屋敷を、その主を野放しにしておくなど、芭蕉においてはあり得ないことだったのだから。

きりきりと、爪を噛みだした伽羅の手を、セイタマールが摑んだ。

「気持ちはわからんでもないが、爪を噛むな。誰に拾われるかわからない『遺留品』を残すな

と俺は子供のころから叩きこまれたぞ。お前は違うのか？」

聖石の使徒や子供は、その能力ゆえに時に狙われることがある。

それが普通の人間であれば、逃れることは難しくはない。

だが、それが瘴気と繋がった者であった場合、髪や爪などを手に入れられたら厄介なことになる。肉体の一部であった頃の気配の糸を辿り、攻撃が仕掛けられることもあるからだ。

だから、彼らは髪や爪の処分には、細心の注意を払わねばならないのだ。

セイタマール同様、幼いころからそのことは、耳にタコができるほど言い聞かされてきたというのに、すっかり失念していた。

噛んでいた指先に目を落とし、「すみません」と伽羅は謝った。

「思い出したのなら、いい。それで、もう少し頑張れば、奥になにがあるのか感じ取れそうなのか？」

青年の問いに、伽羅は悔しさを噛みしめながら、かぶりをふった。

「いいえ……腹立たしいことですが、集められた石の波動が賑やかすぎます……珍しい石を集めたのは、それも狙ってのことなのかもしれません。ここまで種類の違う波動が入り乱れていては、仮に奥から洩れ出た気配があっても、紛れ込んでしまって、視分けることは不可能に近い……」

ふう、と息をついて、伽羅は「お手上げです」とつぶやいた。
少なくとも、今は、これ以上探ることは不可能だった。
（悔しい……なにかあるのは明白なのに、ここからじゃ手が出せない。せめて、屋敷の中に入り込むことができたら、もっとできることもあるのに……）
と、そう考えたとき、ひとつの顔が脳裏を過ぎった。
（そうだ……その方法なら……）
なんとかなるかもしれない。
そのために必要な段取りを考え始めた伽羅は、そんな自分をセイタマールが厳しい目で見つめていることに気づかなかった。
「……伽羅」
低い、迫力満点の声で呼ばれた瞬間、我に返って息を呑んだ。
ちらりと見上げた青年の瞳は、どんな些細なものも見逃すまいとするかのように、鋭い光を放っている。
思わず身を退きかけた伽羅に、しかし青年は怒気を露にすることなく、静かな口調で告げた。
「逸るなよ」

「セイ……」

思いがけない優しくさえ聞こえる声に、伽羅は目を瞠った。

「余人にはない感覚で、お前はすでに真実に近づいているかもしれないが、それはおれも含めた普通の人間には説明されても理解できない領分なんだ。現実として、まだ何も明らかになっていないことを忘れないでくれ。そうでないと、なにもわかっていないおれには……譬え説明してもらったところで、充分に理解できるとは思えないおれには、お前を助けることも支えることも難しい。もどかしいかもしれないが、せめておれにもわかる程度の事実が明らかになるまで、走り出そうとはしないでくれ」

淡々とした言葉だった。

それでいて、胸に染みこんでくる『思い』だった。

言葉の声のその奥に、痛みを隠した……『願い』だった。

（ああ、このひとは……わたしとふたつしか違わないはずのこのひとは、癒えることのないこんな痛みを抱えているのか……）

感応したわけでもないのに、彼の痛みが伝わってきて、伽羅はうなずくことしかできなかった――。

イランドとの待ち合わせの場所は、昨日出会った、神殿前の広場だった。
時刻も同じ――。
ベンチに腰を下ろしたまま、伽羅は三つある広場の入り口に、順番に目を向けた。
どきどきしていた。
実のところ、アーカイド・リワンダがただ同然――あるいは本当に無料で浮曄の住民に配ったという『黒の守り石』が、すべての中心に位置していることは、セイタマールが見抜いた通り、九分九厘伽羅は確信していた。
それも、彼が酒場で拾ってきてくれた情報ゆえだ。
ここ最近の浮曄でおかしなことはなかったか――陸上だけでなく、海上のことも知るために、セイタマールは実際より格段に大人びて見える容姿を武器に、船乗りたちが集まる酒場に出向き、話を集めていたのだ。
得られたのは、真相に迫るかどうかはわからない、だが確かに奇妙ではある、ふたつの話である。
ひとつは、ここ数年、浮曄の港近くで見られる鬼火の数が増えたというもの。

鬼火は死者の魂と言われており、不吉なものと見なされるが、本来そうそう目撃されることはない。

とは言え、まったくあり得ない話でもなく、長く船に乗っている者などは、何度か目にしたことがあるというのが、ごく当たり前のことなのだ。

だが、それはひとつやふたつ――あるいは一度や二度に限ってのこと。

十を超える鬼火を、一度ならず――しかも複数の船乗りが目にしたというのは、あまりにも奇怪なことだった。

さらにおかしいのは、それなりに航海に慣れたはずの船乗りたちの何人かが、海上で異常な行動を取り、命を落としたという話が、やはりいくつか重なったことだ。

船乗りというものは、因果なタチの持ち主で、海にあっては陸を恋い、陸にあっては海に焦がれずにはいられないのだという。

だから、その数人にしても、陸に上がり、数日もしないうちに、海を恋しがったというのは、別段おかしな話ではない。

奇妙なのは、彼らが再び海に戻ってからのことらしい。

海を愛するとは言っても、それはあくまで船上での日々を指すに過ぎない。海にその身を浸すこととはまるで違う。

だというのに、その奇妙な男たちは、船では飽きたらず、海そのものに執着を示し、ついには船から身を投げたのだという。

命を捨てる理由など、彼らの誰一人としてなかった。

いや、それどころか、次の帰港を心から楽しみにし、それを仲間に話していた。

ある男は、ようやく射止めた恋人のもとへ、土産を抱えて戻るのだと笑っており。

ある男は、次に戻るころには、生まれた子供の顔が見られるはずだと、周囲が呆れるほどに惚け。

またある男は、その航海で得た利益で、婚約者に極上の婚礼衣装を買ってやれると喜んでいた。

なのに、彼らは帰るべき港を目の前にして、海にその身を投じたのだ。

周囲は愕然とした——当然のことながら、彼らがそのような挙に及んだ理由を、残された家族や恋人に、説明できる者などいなかった。

ただひとつ——ひとつだけ、彼らに共通点を見いだすとすれば……それは。

恋人や妻や婚約者が、彼らの無事を願い、出航前に手渡したという『守り石』——それだけだった。

その石の種類がなんであったのかはわからない。

その石のたたえる色が、なんであったかもわからない。
ただ、彼らの家族も恋人も婚約者も――決して裕福とはいえぬ状況にあったこと、そして海に出る男の帰還を願うなら、水の篤き加護こそを望むだろうという……一事。
手渡された守り石が、黒い石であった可能性は高い。
だが、それも推測に過ぎない。
彼らは石を懐に抱いたまま、海に身を投じたのだから。
彼らの命を奪った、なにがしかの力を秘めているかもしれない石は、海に沈んでしまい、確かめる術はない。
けれど。
伽羅は確信していた。
男達の命を奪ったのは、手渡された守り石のせいだ、と。
（いや……そう見えるだけで、守り石なんかじゃない……。だけど、贈ったひとも、贈られたひとも、そうだと信じて……なのに……）
歯噛みしながら、伽羅は固く目を瞑った。
セイタマールの言う通り、物証はなく、そうである以上、自分ひとりが主張したところで、誰も納得はしてくれない。

求めるべきは——いま、必要なのは、はっきりと示すことのできる証拠なのだ。
そして、それは……もしかしたら、これから手に入れられるかもしれない。
ぎゅっとこぶしを握りしめた伽羅の背中を、落ち着かせるように、セイタマールの大きな手が撫でた。
「はい……」
小さく答えて、伽羅はただ、待った——己が抱く確信を、周囲に納得させられるだけの証拠となり得る品を手に、アイーシャとイランドが来てくれるのを。

約束より、少し遅れたころ——。
甲高いふたつの声が、なにか言い合いながら近付いて来た。
「なによ、イランドの乱暴者！　馬鹿、大馬鹿！　そんなに引っ張ったら、腕が痛いじゃないの！」
きゃんきゃんと、文句を言うのは、アイーシャだ。
「うるせえ！　お前がぐずるから、急がなきゃならなくなったんだろうがよ！　おら、さっさ

と走れ！」

怒鳴り返しながら、こちらに駆け寄ってくるのはイランド。

少々けたたましいが、そのふたりの姿は、仲の良い子供たちの他愛なくも微笑ましい口喧嘩でしかなく、見ているだけで笑みがこぼれた。

「なによっ！　そんなのイランドの勝手じゃない！」

「おれの勝手じゃねえよ！　お前が昨日、あの綺麗な兄ちゃんと約束したんだろうが！　なのにいきなり逃げ出しやがって。おかげでおれがお前を連れてくるって話になったんだよ！」

そこまで言われた時点で、アイーシャは昨日のことを思い出したらしい。

「あ」

と、口を開けた少女に、「間抜け面」などと――よせばいいのに――憎まれ口を叩いて、少年はこちらに手を振ってきた。

「おーい、おっきい兄ちゃんとちっちゃい綺麗な兄ちゃん、約束通り、阿呆っ子連れてきたぜ！」

イランドに悪意はない……わかってはいるが。

（ちっちゃい……ちっちゃい……）

細っこいだの貧弱な――と言われない分、まだましなのだろうか、と伽羅は思わず遠い目を

してしまった。

因みに「綺麗な」という部分は耳に入っていない。

アイーシャは、イランドの声につられたように、こちらに目を向けて——それから、すっかり昨日のことを忘れていたことを恥じるかのように、小さく俯いた。

イランドに腕を引っ張られても、もう文句をつけようとはしなかった。

(気にしなくて、いいのに)

と、思いながら、伽羅は少女を安心させるために、にこりと笑った。

「こんにちは、アイーシャ」

「……こんにちは」

蚊が鳴くような声で、少女が挨拶を返してくる。

「昨日はありがとうね。自分の間抜けさに落ち込んでたから、アイーシャに声をかけてもらって、いろいろ話ができて、本当に嬉しかった。きちんとお礼が言いたかったんだ」

笑顔で続けると、少女はなぜか、ますます俯いた。

その耳が、真っ赤に染まっていることに、しかし伽羅は気づかなかった。

だから、あれほど元気良かった少女が、もじもじし出した理由も……わかるはずがない。

代わりに感じたのは、イランドから向けられた、責めるような視線だ。

（なにか、まずいことを言っただろうか……？）

困惑して、思わず首を傾げたところ、少年はふるふるとかぶりをふった。

そして、真っ赤になって固まったままの少女を振り返ると、揶揄も露に、「なに、いっちょまえに照れてんだかなー」と突っついた。

いっちょまえ――とは、一人前、という意味だろうか……。

焦点のずれたことを考えている伽羅をよそに、アイーシャとイランドの口喧嘩が再開される。

「馬鹿イランド！　なんで、あんたは馬鹿なことしか言わないのよ！」

「馬鹿、馬鹿いう阿呆っ子のほうが、よっぽど阿呆じゃねえか」

「うるさいわね！　もう、いい！　せっかくイランドの分も貰ってきてあげたのに……昨日お兄ちゃんと約束したけど、お兄ちゃん、上等の服着てたから、お金持ちかなって思って、じゃあ、やっぱりイランドに渡そうと思って、お守り石、貰って来てあげたのに！　イランドになんかあげない！　お兄ちゃんにあげるんだから！」

そう叫んで、少女は懐から、粗末な布の包みを取り出した。

ごうっ、と――。

暗雲に満ちた風が、吹き抜けたような錯覚を覚えた。

ぞっとした。全身が……粟立っていた。

きしきしと、骨が軋むような圧迫感に襲われる。

触れてもいないのに……それは、布に包まれたまま、少女の手に握られているというのに——嫌悪感で動悸が激しくなる。

(触れたくない……でも、触らないとなにもわからない)

「はい、お兄ちゃん」

それが、守り石だと信じて疑っていない少女が、満面の笑みを浮かべて、包みを開いて……そこにある黒い欠片石の一粒を摘み、差し出してくる。

「約束、したんだものね。ごめんね、勝手に約束破ろうとして……怒らないで、受け取ってね？　はい」

セイタマールが、横から手を伸ばそうとしたのに気づいて、伽羅は反射的に、それを払いのけた。

彼が、いまの自分を見て、気遣ってくれているのはわかった。

けれど、これは……自分で確かめなければならないことなのだ。

この街で……否、この街周辺で起こっている不可解な出来事の原因を突き止めるために——たとえどれほど苦しい思いをしようとも、これればかりは、自分が読み解かねばならないことな

のだ。

「……ありがとう、アイーシャ」

震える身体、震える唇（くちびる）――ようようの思いで、伽羅は少女からの『贈り物』を受け取った。

次の刹那（せつな）。

悪寒（おかん）と衝撃と痛みと苦しみが――嵐のような勢いで、襲いかかってきた。

それは、黒い、黒い――嵐。

「あ」

なにも言えない。

「あああ」

指一本動かせない。

「あああぁぁぁ――っっ！」

肉体ではなく、心に襲いかかってきた嵐に、伽羅は絶叫した――。

10

黒い——黒い、波が押し寄せてくる。
呑み込まれて伽羅は、全身がばらばらに引きちぎられるような衝撃を覚えた。
黒い、海のなかに沈む。
沈んだまま、海の表面を見上げる。
本当の海であれば、そこに見えるのは光であるはずなのに——この漆黒の海では、水面の向こうに一筋の光さえ見いだせない。
胸が、しめつけられる。
(痛い、苦しい。痛い、苦しい。痛い、痛い、痛い……苦しい、苦しい、苦しい！)
痛いのはなぜ……誰のせい？
苦しいのはなぜ……誰のせい？
自分のものではない、けれど聞き覚えのある声が、詠うように問いかけてくる。



【痛い、痛い、痛い、痛い】

答えを返さぬ伽羅に焦れたように、より強い響きで迫りながら、それはひとつの光景を見せつける。

夢のように美しい女――その愛を請うが如く、細い手首を両手で包み込む男。

【苦しい、苦しい、苦しい、苦しい】

男の求愛を、きっぱりと拒む女。

【なぜ、なぜ、なぜ、なぜ】

拒まれた男が、美しい女の喉に指を絡め、締め上げている。

【苦しい、いや、やめて、許せない】

――許せない。

ただひとつの思いが凝る。

願いはただひとつだけだったから、踏みにじられたことが忘れられない。

尋ねたいことは、いくつもあった。

なぜ、わたしなの？

なぜ、わたしでなければならなかったの？

なぜ、その愛はわたしを追い詰めることしかできなかったの？

なぜ、なぜ、なぜ……。
【わたしを、解放しては、くれないの……？】
伽羅はもう、見ていることしかできなかった。
男の思いも、女のそれも、到底理解の及ぶところではなかったから。
だから、流れ込んでくる光景を、伽羅はただ、受け止めた。
そうするしか他に、伽羅にできることはなかったから。

骨の髄までぎりぎりと、締め付けてくる苦痛という名の鋭い爪に、息することさえできなくて、凍ってしまった身体に……ゆっくりと、穏やかな熱が染みこんでくる。
それは、赤い光――熱を放つ、焔。
けれど、全てを燃やし尽くす激しさではなく、凍えて強ばる心と体を解してくれる優しさをたたえていた。
（あたたかい……）
その温もりを、もっと感じたくて、伽羅はそれを抱きしめる。

視えた光景と、流れ込んできた昏く重い感情によって、凍り付いてしまった心が、優しい熱によって、少しずつ融けていくのを感じる。

（ああ……）

これが、ずっと……欲しかった。

知らないころから、焦がれていた。

（ようやく、見つけた……）

温かい、炎の波動――。

穏やかな熱に融かされて――昏い眠りから、伽羅は目覚める。

「あ……？」

目を開けると、そこは見覚えのある宿の部屋だった。

（どうして……）

ここ数日、なんだかこんなことが多いな、などと埒もないことを考えながら、伽羅は記憶を辿った。

「気がついたか」
かけられた声は、すでに耳に馴染んだものだ。
「セイ……」
声の主の名を呼ぶと、青年の気配が近づいてきた。
そして、一緒に、もうひとつ――こちらはイヤな波動を放つなにか、もまた。
伽羅は気づかれないように、そっと息をついた。
（このひとは……鈍感と言うか、頑丈というか……）
まだ、回復しきっていない意識と身体には、負担にしかならない『それ』とお近づきになりたくはない伽羅は、「ソレ持ったまま、近寄らないでください」と告げた。
呆れるやら羨ましいやらで、少し冷ややかな口調になってしまったかもしれない。
言われて気づいたらしい青年の気配が、一度離れていく。
「わからないが……そんなにイヤなものか？　こんなちっぽけな欠片石が？」
問いかけてくる声は、心底不思議そうだった。
「大きさは関係ありませんよ……体調が崩れるはずです。そんなモノが山ほど街中にばらまかれていただなんて……」
つぶやいた自分の言葉に、思わず震えた。

痛みと恐怖が甦ってくる。知らず、我が身を掻き抱いた伽羅は、抱いているのが自分自身だけでないことに、そのとき初めて気がついた。

布に包まれた……固く、長い棒状のもの。

触れた部分から、優しい熱が伝わってくる。

（ああ、これ、だったんだ……）

昏い眠りから、自分を引き上げてくれたもの。

何であるのか——見ずともわかる。

セイタマールの、分身とも呼べるものだ。恐らく、薬湯だけでは間に合わないと思って、持たせてくれたのだろう。

瘴気には鈍感なくせに、気遣いは絶妙だ。

それを支えにしながら、伽羅は寝台に身を起こした。目眩はない。たいした効き目だと、それを再び抱きしめた。

「また、ご迷惑をおかけしてしまいましたね。すみませんでした」

小さく頭を下げると、さぞ呆れかえっているだろうと思ったセイタマールが振り返った。

「今回は不可抗力だからな、気にするな。それより、なにが視えた？　……視えたんだろう？」

問いではなく、確認を取る言葉に、伽羅はうなずいた。
「はい。アイーシャが持っていたもの……そして、死んだ船乗りたちが持っていたものは、間違いなく黒の守り石です。ただし、すでに本来の力を失っただけでなく、瘴気に汚染された……謂わば、毒の結晶です。あんなものを持たされたら、命を落としてもおかしくない。怪我ですんだひとは幸運と言っていいぐらいです」
そんなものを、ばらまいたのは、間違いなくアーカイド・リワンダだ。
何のために――？
恐らくは、定期的に大量の黒の守り石を購入する行為を、周囲から不審がらせないためだ。毒気を孕んだ欠片石を、手放すことで保身をはかる意味も兼ねているのだろう。
あまりにも自己中心的なその行為に、吐き気を覚える。
「瘴気……ということは、アーカイド・リワンダが、その源だということか？」
それを神殿に悟らせないために、黒い守り石に瘴気を吸わせ、周囲の目を欺いているのか？
セイタマールの問いは、最もあり得そうな推論に基づいたものだったが、これには伽羅はかぶりをふった。
「違います。もし、これほどの瘴気を放つほどに蝕まれていたら、すでに人間の姿を保ってはいられません。瘴気を放つなにかが、リワンダの手元にあるんです。それを隠すためか……あ

るいは手放さないために、彼は守り石を集めているのでしょう」

アーカイド・リワンダが特に買い集めているという、三色の守り石。

黒は、瘴気を宥めるために。しかし、強烈すぎる瘴気は、守り石が持つ浄化の力さえ大きく凌駕しており、だからこそ黒い守り石は定期的に取り替えられる。

それでも……それほどの瘴気、そばにいて影響されないはずがない。

だから、それを阻み、少しでも封じるために、『水』に剋つ『土』の気を宿す、黄色の石を用意し、『土』を生ずる『火』の石をそばに配置することによって、『土』の気を増幅させたのだ。

「……そこまでして……っ！」

怒りに、声が震えるのを止められない。

（アーカイド・リワンダ！　お前は、ひとをなんだと思ってるんだ!?）

気づかなければ、あの小さな少女は、欠片石に染みついた毒気によって、命を落としていたかもしれないのだ。

到底、許せることではなかった。

爪が食い込むほどに強く、握りしめた右手に、不意にセイタマールの手が重なった。

「ここまでだな」

かけられたのは、感情の欠けた声――伽羅は一瞬、なにを言われたのか理解できなかった。
「……セイ？」
「ここまでだと言ったんだ。おれたちが浮曄に来たのは、相次ぐ変死の原因を調査するためだ……忘れたわけではないだろう？　お前は、見事に読み解いた。遊羽の神殿に報告すれば任務は完了だ。後のことは、遊羽が決めることだ」
「なにを……」
（なにを言ってるんだ、このひとは!?　これほどの非道が明らかになったというのに、このまま遊羽に戻る？　新たに使徒が派遣されてくるまでの間にも、あの欠片石のせいで、どれだけの命が失われるかもしれないというのに！）
「セイ、セイ！　待ってください！」
「なにをだ？　おれはなにかおかしなことを言っているか？　お前がどんなつもりであろうと、おれはお前を遊羽に連れ戻すぞ。感情に目を眩まされているのなら、はっきり言ってやる。これは、おれたちの手に負える代物じゃない」
突きつけられる――厳然とした事実。
「ですが……セイ……！」
言いつのろうとするが、うまく言葉が出てこなかった。

セイタマールの言葉は、非の打ち所がない正論だったからだ。
（それでも……ああ、それでも！）
譲れない、と伽羅は思った。
全てを打ち明けてはいないからこその、セイタマールのこの言葉。では、明かせば彼はうなずいてくれるだろうか……？
この身の秘密――その意味を。
（駄目だ……きっと、このひとは肯んじない）
確信できてしまうのは、彼の優しさと、未だ癒えぬ心の傷の存在を知るからだ。
だが、伽羅はどうしても、このまま遊羽に戻ることはできなかった。
だから――。
（許して、ください……）
気づかれないよう、声なくつぶやいて、伽羅は真っ直ぐに顔を上げた。
「まだです。まだ、元凶を……瘴気を放つものの正体を、突き止めてはいません」
駄々をこねる子供にしか、見えないだろうことは承知で、伽羅は言い張った。
「セイ、あなたが言ったんですよ。ひとにはない感覚で摑んだ事実は理解できないと……納得できないと。これだけでは、神殿を動かすことは難しい……決定的な事実が必要です」

そうでなければ、神殿はわたしの仕事の完遂も認めないでしょう――。

こだわる理由はそこにあるのだと、セイタマールの意識を誘導し、伽羅ははっきりと言い切った。

「アーカイド・リワンダの屋敷へ乗り込み、元凶の正体を確かめます」

11

伽羅の宣言から三日後――ふたりが浮嚊を訪れて六日目の午後。

伽羅とセイタマールのふたりは、守石商であるリッカー氏に伴われて、リワンダ邸を訪れ、屋敷の主人であるアーカイドと対面していた。

贅沢な大理石のテーブルの上、ビロードを張られた、蓋のない箱の上に、置かれているのは鮮やかな微かに赤味を帯びた黄色と明るい緑の、澄んだ輝きを放つ二粒の守り石――。

アーカイドが、食い入るように、その石を見つめている。

「これは……素晴らしいとしかいいようがない」

感嘆の声を上げる男の目は、小鳥の卵ほどの大きさの石から離れない――否、離せないのかもしれない。

「さようでございましょう？　わたしも、初めて見たときは、思わず我が目を疑ったものです……長年守石商をやってまいりましたが、これほどに上質で貴重な石を目にしたのは初めてで

すよ」

ふたりをここに連れてきたリッカー氏が、嬉々としてうなずいた。

「わたしもだ」

アーカイドが、喉に籠もったような声でうなずく。

食い入るように二粒の守り石を見つめる瞳は、興奮に輝いていた。

それはそうだろう――と、伽羅は内心の思いを綺麗に隠したまま、思う。

なにしろ、伽羅がリッカー氏に手放したいと相談した守り石というのは、稀少性では並ぶものがないという代物だったからだ。

聖石の使徒は多く存在すれど、貴石としての価値も高いそれを抱いて生まれてきた者は、あまり多くはない。石の種類ゆえに、あまり生まれないのではなく、特異なまでの能力を持った者が生まれながらに抱いてきた石が、稀少な貴石であることが多いせいである。

黄色い聖石は、まずほとんどは黄水晶と言っていい。

緑のそれは、もっと種類が多い。

砂金水晶、軟玉、瑪瑙、尖晶石に柘榴石、翡翠などなど色としては珍しくない。

だが、そこに置かれている二粒の守り石は、前述したどの石も持ちえぬ色彩をたたえている。

「黄玉と……緑柱石、ですかな？」

ごくりと喉を鳴らして、確認を取るようにアーカイドが尋ねてきた。

伽羅はちらり、とセイタマールに視線を投げ、応対を促した。

一瞬、投げ返された視線が……剣呑だったと思うのは、きっと気のせいではない。

（お前のほうが、聖石の知識は豊かだろうが！）

という、心の声が聞こえて来そうだ。

しかし、それはそれ、これはこれ――この場で交渉に携わるのは、セイタマールのほうが相応しい。十代前半にしか見えない子供と、二十歳前後――実際は二歳しか違わないというのに、この外見的差異はなんなのだ、と思わないでもないのだが――の青年。誰が見ても、取り引きの相手と見なすのは、セイタマールのほうだ。

だからこそ、事前に彼には石の種類や、その性質についての補足説明をしたのだ――守石商であるリッカー氏の、不審を買わぬ程度には。そうでなければ、アーカイド・リワンダまで、縁をつなげることはできなかったから。

「さすがですね」

しばしの沈黙の後に紡がれた言葉は、セイタマールの低い声音のために、まったく不自然には響かなかった。

「これらは、ひとり息子であるカラさまのために、我が主が手を尽くして入手なさった守り石の一部です。樹翁と豊珠から取り寄せたものだと聞いております」

他大陸の名を出され、リッカー氏とリワンダ、ふたりともが目を瞠った。

しかし、リワンダはすぐに、不審を覚えた様子で首をかしげた。

「そんな貴重な守り石を、なぜ手放す気になったのか、聞いていいかね？　言うまでもないだろうが、これほどに大粒の、しかもこの緋芭ではまず手に入れられない守り石、一度手放せば、二度とは取り戻せないことはわかっているのかな？」

年若い相手の、浅慮を窘めるような口調で問いかけてくるリワンダに、セイタマールがため息混じりに答えた。

「……それは重々承知しておりますが、いまはこの強すぎる守り石を遠ざけることこそが肝要かと思いまして。リッカー氏には、カラさまがすでに話しておいでだと聞いておりますが……カラさまは先日、命を落としてもおかしくない、大きな事故に巻き込まれ、軽くはない怪我を負われたのです。その際、カラさまが持っておられた赤と黒の天眼石の守り石は、まるでカラさまの身代わりになったかのように砕け散ってしまいました。もともと敏感でいらっしゃるカラさまは、怪我と天眼石の喪失のせいで、かなり身体が弱ってらっしゃるのです……」

すらすら、すらすらと、セイタマールは堂に入った演技で、説得力抜群な言葉をリワンダに

示してくれる。

（セイって、もしかしたら、演じるのが向いているかも……）

などと、本人が聞いたら、きっとちっとも嬉しくないだろう感想を覚えながら、伽羅はこれなら大丈夫そうだ、と判断した。

守り石売買に関することは、セイタマールに一任して、予定通り、屋敷の内部を探るのに集中することにした。

数多の守り石の気配に溢れたこの屋敷で、それは尋常ではない負担のかかる行為だったが、伽羅に迷いはなかった。

なぜなら、この屋敷に潜む謎のからくりを解かない限り、罪もないひとたちの命は消えつづけるのだから。

そんなことは、断じて許せない。

（意識を澄ませて……広げて……感じて……）

思い、実行しながら、伽羅はそっと隣に座るセイタマールに——正確には、彼が腰に提げている剣に触れた。

流れ込んでくる、静かで穏やかな、熱。

それは、伽羅が汚染された黒の欠片石に触れたせいで、意識を手放したとき、癒して現実に

引き戻してくれた、あの優しい波動と同じものだ。
安心する。
瘴気だらけのこの屋敷にいて、こんなにも集中できるのは、この気配が……セイタマールがいるから。
（だから、わたしは安心して、全力を揮える）
同時にそれは、いまだ秘密を抱えたまま、明かしていないセイタマールへの裏切りに通じることかもしれないけれど。
（意識を広げて……この屋敷の隅々まで……）
集中しはじめた伽羅をよそに、セイタマールとリワンダの駆け引きは続く。
「カラさまは、幼いころ病弱でいらっしゃったせいか、気配や向けられる害意といったものに敏感なのです。ご両親が、お取り寄せになったふたつの天眼石のおかげで、そうしたものに悩まされることはなくなったのですが、先日の件のせいで、天眼石の守りを失われた今のカラさまにとって、このふたつの守り石が宿す力は強すぎるのです……」
どちらかといえば、棒読みに近いセイタマールの説明は、しかし逆に事態の深刻さを物語るような効果を醸しだしている。
「強すぎる守護の力は、いまの弱ったカラさまにとっては、毒でしかないのです……現に、天

眼石を失われて以来、二度もお倒れになりました……祖国である芭蕉を出て以来、このようなことは初めてなのです……」

このあたりのシナリオは、伽羅が書いたものである。

その手の知識がない者が聞いたところで、意味不明な説明は、しかし、理解できる者にはもっともだと得心のいくものなのだ。

リッカー氏の同席を意識して用意した『石を手放す理由』に、期待通り、リッカー氏はうなずき、リワンダにそういうことは珍しくないことなのだと説明してくれる。

(もう少し、だ……)

蜘蛛の糸のように、細く、長く、広く——感覚という名の糸を紡ぎ、伸ばしていく。

(ここ、だ。確かに、ここにある)

確信できるのは、あの欠片石から伝わってきたものと同じ黒く昏い力が、押し寄せてくるのを感じるから。

昨日のように、意識を失わずに済んでいるのは、そばにセイタマールがいてくれるから。

彼の放つ清涼にして温かな、炎の気配をも宿した力は、何よりの助けとなる。

(どこだ……どこに……そうだ、水。水の気配……奥? そして……深い? 地下室? 地下室に、どうして水……いや、『海』の気配が……!?)

理性や知識が疑問を呈する。
けれど、伽羅は物心ついてからというもの、一日として欠かすことのなかった修行で得たものを、信じるだけの自信があった。
（疑問はこの際、後回しだ。なにがある……？　地下に……海に繋がる気配が充ち満ちた、封じられたその場所に、いったい何が……？）
希求する心――それが、真実を引き寄せる。
一瞬の、それは奇跡。
脳裏に浮かんだ光景に、伽羅は思わず立ち上がった。
「カラさん？」
「カラ殿？」
「伽羅!?」
三人が、驚いた目を向けてくるのに対し、すでに取り繕う気がない伽羅は、ただひとり――セイタマールに向かって、言葉を放った。
「セイ、一緒に来てください！」
叫ぶと同時に、伽羅は懐から新たな守り石を取り出し、招請の言葉とともに宙に放り投げた。

「風霊っ！」

空中で、きらきらと輝くのは、菫青石。

芭蕉の神殿で、親しくしていた使徒から貰った子供石だ。

伽羅の声が響くと同時に、鍵がかけられていたはずの窓が開き、強い風が室内に入り込んできた。

「瘴気を散らして、わたしたちの周囲を清らかに保ってくれ！　わたしの行く手を阻む者は、命を奪らない程度に排除！　残る力はただ、セイに……セイの力を増すために！」

言い置き、伽羅は走り出した。

探査し、突き止めた――瘴気の源のある場所へと。

「伽羅！　おい、待て！」

怒気を孕んだセイタマールの声が、背後から聞こえたが、足を止めることはしなかった。

ただ、風霊への頼みに追加事項を加える必要性に気づき、懐から新たに――今度は小粒ながら、宿る力は比類なき、青玉を取り出し、風霊たちに差し出した。

「セイの力を損ねることなく、けれど、彼がわたしを止めようとしたら、そのときは阻んでくれ！　誰であれ、いまのわたしを止めることは許さない！」

伽羅の叫びに、集った風霊たちがうなずくのが視えた。

（すみません、セイ……でも、わたしは、どうしても――）
どうしても――伽羅はそこへ行かねばならなかったのだ。

風霊たちに、邪魔者を排除させて、ようやくたどり着いたのは、見るからに重そうな、黄色みがかった縞の入った大理石の扉――。
地霊の気配を感じながら、伽羅は再び懐に手を伸ばす。
（なんだか、知り合いからの餞別ばっかり頼ってるみたいで、格好悪いけど……）
いまは、自分の面子にこだわっている場合ではない。
（だって、いる……この奥に、きっと、いる）
それは、確信。
欠片石に触れただけで、意識を失ったのは、なにも体調が悪かったせいだけではない。
ずっと、皆が捜していた……自分も会いたくて仕方なかったひとの気配を……歪んでしまっていても、間違うはずのないあのひとのそれを、確かに感じ取ったから――それが、生者のものでないことに気づいたからこそ、衝撃を受けたのだ。

取り出したのは、ウズラの卵ほどの大きさの黄玉――リワンダに売買を持ちかけるために差し出したそれとは比べものにならない力に溢れた『地』の石。

「地霊。これをやる……だから、代わりにこの扉を開いてくれ」

極上の黄玉を差し出され、地霊たちはすぐに伽羅の要請に応えた。

重い音をたてながら、ゆっくりと大理石の扉が開かれる。

開いた隙間から、溢れ出してくるのは瘴気――無惨に殺された恨みが悲しみが苦しみが、凝って不可視の毒と化したもの。

本来であれば、伽羅の心と体をなにより蝕む危険な毒。

だが、風霊に守られている今は、その脅威は遠い。

だから。

開かれた扉の向こうに広がる光景を、伽羅はただ見つめ、喉を詰まらせたのだ。

アーカイド・リワンダが、自らの屋敷の地下に隠していた、幾重にも封印された『海の部屋』……。

神殿の祭儀に使われる泉を彷彿とさせる、長方体の石のみで作られた人工の泉に、しかし満たされているのは海水だった。

その泉の中心部に、安置されている……ひとりの女性の遺体。

時の流れから切り離された、朽ちることのない物体と化してしまったそのひとのことを、伽羅はよく知っていた。

大好きなひとだった。

絶対に見つけるつもりだった。

けれど――こんな風に、再会したいと思っていたわけではなかった。

「シャーニ……」

半ば泣くように、そこに眠るひとの名を口にした。

「シャークネーニ……」

水の篤き加護を受けた、黒真珠の使徒であったそのひとの命はすでに消え失せ――。

自らの意志を踏みにじり、その命さえも奪った男への憎悪と怨嗟をまき散らす存在へと変じていた。

胸に合わされた、両手の中に包みこまれた――彼女が抱いて生まれてきた黒真珠をその核として……。

それこそが、数多の黒の守り石を浸食し、今も汚染し続けている瘴気の源だった。

イヤな予感はあったのだ。

この浮曄で起こっている事件の原因を、突き止めるために派遣されてきた自分たちではあったのだが、無理矢理組まされた伽羅のことを知れば知るだけ、「なにかしでかすかもしれない」とは思って、それなり以上に用心していたのだ。

……その、つもりだった。

だが、浮曄に着くなり体調を崩し、翌日勝手に飛び出した挙句に倒れ、そのまた翌日、またしても瘴気に当てられ気を失って——。

やる気は認めるが、どうにも実戦向きな体質ではなかろうと、セイタマールが判断したのは無理のないことだった。

毒気にあたる度に人事不省に陥るようでは、到底荒事には向かない。

もともと、命じられたのは、この街で起こっている変死事件の調査だった。

そう——あくまで、調査だ。

解決ではない。

だのに、あの子供は妙なこだわりを持っているようで……思えばそのとき、早々に釘を刺しておけばよかったのかもしれない、と思う。

けれど、そうはいかなくて。
子供のくせに、理路整然と正論をぶつけてきて、縋るような目をして、自分の仕事を全うしたいのだと訴えかけてきた。
それにほだされ、こんな茶番につきあった自分も自分だが――しかし。
（それを利用したあいつは、かなりな性悪じゃないか？）
と――そう思ってしまうのは、先ほどからひっきりなしに襲いかかってくる風霊の妨害があるからだ。
伽羅の仕業であることはわかっている。
（あの子供……っ！）
一度、泣くまで締め上げてやる――！
そう、心に誓いながら、伽羅を結局追いかける形になったセイタマールは――それを、目の当たりにするまで、心の奥底に封じることが許されていた、過去の記憶を引きずり出された。
それは……そこに広がる事実は、セイタマールの記憶にも、深く重なるものだったため、到底無心ではいられなかったのだ。
「な……!?」
壊された扉の奥――。

広がる光景に、声をなくした。
目の前には、立ちつくす伽羅の姿がある。そして、その向こう側に――。
一目で、命が宿っていないとわかる、女性の身体が横たえられている。その両手に包まれるように置かれた大粒の黒真珠。
周囲を包む水。
その水底を埋め尽くすようにまかれた……無数の黒い石。
どくん、と胸が大きく脈打った。
(なんだ、これは……!?)
知りたくなくとも悟らずにはいられなかった。
わかりたくなくとも、信じざるを得なかった。
「シャーニ――シャークネーニ……黒真珠の使徒で、三年前から、行方知れずになっていた女性です――」
振り返ることなく、立ちつくした伽羅が、感情のこもらない声で、説明した。
(黒……真珠……!)
告げられた言葉に、動悸が激しくなるのを感じた。
「わたしとは十二違いの……同じ海の宮の年、海の宮の月、水の宮の日の水の宮の刻に生まれ

た、ただひとりの、わたしの同胞」

続けて告げられた伽羅の言葉に、胸が軋んだ。

海と水の篤すぎるほどの加護を受けた存在――それは、別種の大きすぎる危険性を孕んでいる。

水神カンラタールは、海神アイルトーリの息子。その縁ゆえに、両者はほぼ同じものと見なされる。

そして、海たる属性は、ほかのなにより、月の影響を受けるもの。

月神サラムトーリのそれならよい。だが、今は失われたとはいえ、世界にはかつて、ほかにふたつの月が……月神が在った。

諍いと妬みとで、世界に毒を落とした、三つ子のうちのふたりの兄弟神――シイムタールとサイサロールという名の喪月神が！

母たる創造神バルヴァローズによって命を絶たれた後も、その執着と負の念は、世界を破滅へと導かんと、目覚めるときを待っている。

それ、に最も近しき者の心が、堕ちてくるのを――そうして堕ちたる神々が洩らした毒に染まるのを、待って、いる。

篤き海の加護を受け、聖石を抱いて生まれてきた存在を。

どくん、と心臓が痛いほどに大きく脈打った。
四年経っても、未だ癒えることのない痛み――それをもたらした記憶が、甦る。
「ま、さか……」
命の息吹がないことが、信じれぬほど瑞々しく保たれたままの、朽ちぬ肉体。
感知能力などほとんどない自分でも、肌で感じ取れる――凄まじい、瘴気。
心に浮かんだ、恐ろしい可能性を、しかし背を向けたままの伽羅が否定した。
「いいえ、セイ。違います」
細すぎる肩を震わせながら、少年は淡々とした口調で語った。
「シャーニは堕ちてはいません……まだ。リワンダに恋慕され、拒んだ結果殺されて……命の消えた肉体を、土にも海にも還されず……こんな不自然な状態で置かれていても、それでも彼女は、喪月神の瘴気に染まってはいない……でも」
振り返らぬ伽羅が痛々しかった。
「伽羅」
呼びかけても、少年は動かない。
「このままでは、早晩、彼女の怒りと悲しみは、喪われた月神の気を呼び寄せてしまう。死者に迷いや躊躇いはない……そうなったら、彼女は喪月神の残された念の人形とされてしまいま

す……そんなことには、させられない」
一言一言を、噛みしめるように告げる少年が、ゆっくりと振り返った。
漆黒の濡れた瞳が、ひたとセイタマールを見つめる。
どくり、と動悸がまた激しくなる――不吉な予感に、セイタマールは少年の口を塞いでも、次の言葉を紡がせたくない、と思った。
しかし、足は一歩も前には進まない。
少年が、静かな表情で、言を継ぐ――こちらの心など、はなから無視した酷い言葉を。
「わたしが、彼女の生み出す瘴気を呑み込みます。ですから、お願いです……セイ。後を……後を頼みます」
お願いです――と言いながら、そこにこちらの意志を問う響きは宿っていない。
「馬……」
(馬鹿を言うな!)
叫びたいのに、声が出ないのは、きっと伽羅の頼みを聞き届けた風霊たちのせいだ。
「あなたにしか、頼めません……お叱りは、後でいくらでも」
そう言うなり、少年は再び前を向き、迷いのない足取りで、シャークネーニの遺体へと近づいていく。

（よせ、やめろ……無茶をするな！　いくら篤い水の加護を受けているからといって、お前はまだ、使徒としての名も得てはいないじゃないか！）

叫びたいのに、相変わらず声は出ず、足も手も、ぴくりとも動かない。

少年の背中が、遠ざかる。

（伽羅！）

声にならぬ声は、彼を引き留める力とはなり得ない。

（伽羅！）

歩みを止めぬ少年は、ついに亡き女性の使徒の正面に立った。

「シャーニ……可哀相に……こんなことになって……っっ！」

語りかける声が震えていた。

（やめろ）

伽羅が、ゆっくりと『彼女』に手を伸ばす――。

（やめろ！）

その指先が、遺体に触れるか触れないかというところまで近づいたとき、少年はもう一度だけ、セイタマールを振り返った。

「すみません」

一言だけ、詫びの言葉を口にして。
躊躇うことなく、瘴気の源である、『シャークネーニの黒真珠』を摑み取った――。

それは、一瞬のことだった。
瘴気に鈍感なセイタマールにすら感じ取れた、劇的な変化――。
その場の空気さえ昏く染めていた黒い気が、刹那のうちに消え失せたのだ。
「なんだ、お前達……なにをしたっっ!?」
ようやく追いついてきたアーカイド・リワンダが、異常に気づいて声を上げた。
その背後には、屋敷の警護に雇われたとおぼしき男たちがいる。だが、誰も室内に踏み込んで来ようとはしない。
いや、できないのだ。
彼らの目は、未だこちらに背を向けたままの少年に釘付けになっている――正確には、その身を包む、黒い……煙にも似た揺らぎから、目を逸らせないのだ。
「伽、羅……」

ようやく、絞り出せた声——ようやく呼べた少年の名に、しかし相手は応えない。

「違う、わよ？」

代わりに返ってきたのは、伽羅のものではない、落ち着いた大人の女性のそれ。

くすくすと笑いながら、そのひとが振り返った。

伽羅の顔、伽羅の身体——だが、宿っているのは、少年の意識ではなかった。

その漆黒の瞳は、背筋が寒くなるような、凄まじい憎悪をたたえている。

「アーカイド・リワンダ。最低の男」

憎しみの歌を、伽羅に宿った『彼女』が奏でる。

「船上で病に倒れたお前を、同じ船に乗り合わせた縁で助けてやったのはわたし。峠を越してもまだ心配で、請われるまま、この屋敷に付き添ってやったわたしに、お前はなにをした？」

憎悪に凍えた眼差しを向けられ、リワンダがごくりと喉を鳴らした。

「シャークネーニ……シャークネーニなのか……？」

男が紡ぎ出したのは、恐怖と歓喜が入り交じった、なんとも奇妙な声だった。

「思いを告げ、わたしが拒むと同時に、この屋敷に閉じこめた……」

憎悪の歌は、続く。

「あ、愛してたんだ……いや、今も愛してるんだ！」

男の必死な声は、しかし『彼女』の心には届かない。
「逃げだそうとしたわたしを手にかけ、亡骸さえも辱めて……」
土にも海にも還れぬように、こんなところに縫い止めて――。
声に宿る憎悪が、膨れあがる。
「手放したくなかった……どうしても、手放したくなかったのだ！」
「還りたかった……わたしは還りたかったのに……！」
「シャークネーニ！」
死した後もなお拒絶されて、リワンダが悲鳴を上げた。
そんな男に、『彼女』は憎悪だけを返す。
「わたしを呼ぶな。穢らわしい」
それきり、男のことなど無視して、『彼女』は宿る器の両手を見つめた。
「懐かしい気配……愛しい子。この子に宿れば、わたしは帰ることができる……」
うっとりと、そうつぶやく姿に、セイタマールは息を呑んだ。
すでに瘴気の結晶と成りはてた、黒真珠の使徒の未練――そんなものを宿して、伽羅が無事にすむはずがない。
シャークネーニが放った瘴気に染まった欠片石に触れただけで、意識を失うほどの衝撃を受

けていたというのに、芭蕉までなど保つはずがない！

「やめろ」

思うより先に、言葉は口を突いて出た。

「死者の念がどれほど生者を蝕むか、黒真珠の使徒であったあなたにわからないはずがないだろう!?　離れてくれ。そいつはすぐ倒れて熱を出す、貧弱なやつなんだ」

シャークネーニを宿した伽羅の目が、驚いたように見開かれた。

「この子を心配しているの？　でも、わたしを受け入れることを選んだのは、この子なのよ。生まれた時から、ずっと可愛がってきたわ……愛しい伽羅。この子と一緒なら、わたしは芭蕉に戻れるの……そのために、この子はわたしを受け入れてくれたのよ？　あなたが口出しすることじゃないわ」

声は変わらず歌のように響く。

だが、それが正気で紡がれたものでないことは、使徒たるセイタマールにはわかりすぎるほどにわかる。

いや、生者と死者の思考の差というべきか。

生きていたころの『彼女』であれば、決してこのようなことは口にしなかったはずだ――。

（だが、どうする……）

どうすれば、伽羅から『彼女』を引き離せる？
必死に考えを巡らすセイタマールは、伽羅の唇が微かに震えるのを認め、その名を呼んだ。
「伽羅!?」
「……セイ……」
宿る意識は変わらず『彼女』のもの――にも拘わらず、ぎこちない声が、伽羅の『言葉』を紡いだ。
「……あなた、の……剣で……」
冷水を浴びせかけられたような衝撃を覚えた。
「なにを言ってるんだ、お前は!?」
止めるために、怒鳴りつけるが、伽羅は口を噤まなかった。
「浄化の……剣で……どうか、彼女を……」
お願いします――と、少年の唇が、声にならない言葉を刻んだ。
どくどくと、体内の血が流れる音がうるさいほどに大きく聞こえた。

（なにを……言った？　伽羅は、なにを……）

認めたくない思いに、セイタマールは唇を噛みしめる。

腰に下げた剣が、重い。

脳裏に甦る――ひとりの女性の顔。

『いまよ、セイタマール！　お願い！』

その先に待つものが、何であるのか知りながら、そう叫んだ真珠の使徒――ラークラーニ。

喪月神の瘴気に侵されて、早晩傀儡になるよりはと、セイタマールの剣に貫かれ、命を落とすことを選んだ……残酷な女性。

それまで、セイタマールは知らなかった――自身の剣が絶つのは瘴気だけであり、ひとの身体を傷つけることはないのだと……ずっと信じていた。

喪月神の瘴気に侵食された人間だけは、肉体ごと葬り去るのだとは……知らなかった。

そして、それこそが、神殿が彼に生まれてすぐ、使徒名をつけた最大の理由だったとは。

喪月神に侵された者は、尋常ならざる力を発揮する――聖石を抱いて生まれてきた者であれば、その力は計り知れない。同じ実力であった使徒でさえ、太刀打ちできずに返り討ちにあう。

セイタマールは、そんな神殿の切り札として、大切に育てられたのだ――世界に害なす存在

の命を摘む狩人として。

その事実を知って以来、セイタマールは生身の相手に向かって、剣を振るえなくなった。傷つけることはないと、わかっていても、血に染まったラークラーニの顔が脳裏に浮かび、どうしても斬ることができなくなった。

セイタマールの持つ浄化の能力は、柄に己が聖石の子供石である血赤珊瑚を埋めこんだ、愛剣を通じてしか発揮されぬもの。剣を振るえぬ彼には、なんの力もない。

それでもいいと、思っていた。

再びひとを手にかけるよりは、と。

だのに――。

(俺に、剣を取れというのか……)

ぎり、と唇を噛みしめた。

(自分に向かって、俺に剣を振り下ろせというのか……伽羅!?)

できるわけがないではないか。

そんなものをあてにして、彼はその身を『彼女』に委ねたというのか。

(できる、わけが……)

そう、セイタマールが思ったとき――。

再び、伽羅の唇が動いた。

「……セイ……っ！」

懇願する、声――漆黒の瞳には、縋るような光が宿っていた。

「……ひ、どい……やつだな、お前は……」

血の味が、口の中に広がった。

そして――そうして。

セイタマールは腰から剣を、抜いた――。

12

目覚めた時、目に飛び込んできたのは、泊まっている宿の部屋の天井ではなかった。
白に金の蔓草模様――青い小鳥がところどころに描かれている。
しんと、静まりかえった空気には、ほとんど雑気が感じられない。
街中では考えられぬ、澄みすぎたそれで、伽羅は自分がいまいる場所を確信した。
（神殿……か）
そっと目をつむり、小さく息をつく。
記憶ははっきりしており、何が起こったかは全部思い出せた――セイタマールの剣で、左肩を貫かれた瞬間までは。
血赤珊瑚の使徒である青年の、苦しげに歪んだ顔が脳裏に浮かび上がり、伽羅は自己嫌悪に陥る。
（セイ……）

刃が肩を貫いた刹那、流れ込んできた、彼の記憶は、あまりにも痛々しいものだった。

血赤珊瑚の子供石を嵌めこんだ、聖別された特別な剣――瘴気を浄化するためだけに、存在すると信じていた彼にとって、ラークラーニという女性の命を奪った事実は、どれほどに重くのしかかったことだろう……。

（二度と振るいたくないと……あんなにも強く思っていたあのひとに、無理矢理剣を抜かせてしまった……）

セイタマールはきっと、自分のことを許してはくれないだろう。

それしか方法はなかったから、彼に頼んだ。いま考えても、他に道は考えつかない。

黒真珠に刻みこまれていた、シャークネーニの意識の欠片――憎悪によって膨れ上がる一方のあの瘴気を、放ってはおけなかった。

残されていたのは、彼女の魂ではなかったけれど――それでも、あんな苦しい思いを、残しておきたくなかったのだ。

だから、黒真珠に手を伸ばし、それらすべてを我が身に受けた。

海の宮の年の海の宮の月、水の宮の日の水の宮の刻――黒珊瑚を抱いて生まれてきた伽羅にしか、できないことだった。

瘴気を自らの体内に受け入れる――それが、伽羅の稀有な能力なのだ。

それほど強いものでなければ、水の持つ浄化力で、他者の手を借りることなく、宥めることもできる。

使徒名を名乗れずとも、伽羅もまた生まれながらの使徒なのだから。

だが、今回の瘴気は大きすぎた。シャークネーニの分身たる黒真珠に刻みこまれた憎悪はあまりに強く、不自然に保たれた亡骸は、それをより大きく育てる結果を招いた。

あれほどに強い瘴気は、さすがに体内で浄化しきれるものではない。その前に、身体が耐えきれなくなってしまう。

そう、セイタマールの力がなければ、自滅していた可能性が高いのだ。

そして――最悪なのは、伽羅が彼の力を当てにしていたということだ。

昨日倒れた時、お守り代わりに持たされた布の包み――伝わってくる波動から、伽羅はそれが浄化の剣であることを知った。

彼ならば、浄化できると……してくれると、勝手に決めつけ、瘴気を辿った。

（あんな過去があったなんて――）

知っていたら、剣を抜かせたりしなかった……とは、言い切れない自分が厭わしい。

セイタマールの能力こそが、自分の最も望むものだとわかってしまった今となっては。

（ああ、でも……）

きっと、彼は許してくれないだろう。
無傷ではすまなかった、左肩の傷は、彼の心をさらに追い詰めたに違いないのだから。
(それでも、わたしは多分……)
湧き上がる、身勝手この上ない思いに、伽羅は苦い吐息を洩らした。

伽羅の意識が戻ったと聞き、セイタマールはすぐにその部屋に向かった。
見舞いではない。
不本意な真似を強いられたことに対する怒りと、騙されていたことに対するそれを、思う存分叩きつけるためだった。
昨日、伽羅に宿ったシャークネーニの残留思念と、それによって育った瘴気を浄化したすぐ後に、風霊たちの知らせを受けた、神殿の者がリワンダ邸に駆けつけた。
喪月神の瘴気ではなかったにも拘わらず、浄化の際、伽羅の肩を傷つけてしまったことに絶望を覚えていたセイタマールにとって、彼らの登場は、心底ありがたかった。
医師の手配を頼み、意識を失った伽羅のかわりに事情を説明した彼は、治療を終えた医師を

捕まえ、怪我の程度を尋ねたのだ。
その医師から聞かされた話に、セイタマールは目の前が真っ赤になるほどの憤りを覚えたのだ。
伽羅に対して、好意的な認識を抱いていただけに、尚更怒りは大きかった。裏切られたとさえ、一瞬思った。
だから――寝台に身体を起こした伽羅の姿を目にした時、声がいつもより低くなったのは、仕方のないことだった。
「釈明があるなら、聞こうか……この嘘つき娘」
後ろめたそうに、毛布の上を彷徨っていた漆黒の瞳が、弾かれたようにセイタマールに向けられた。
「娘……？」
驚いた顔に、つい騙されそうになる。
だが、伽羅を診た医師から直接聞いたことだ――伽羅は少年では、ない。
「娘、だろう……？　それと、なぜ名前を偽ったのかも聞いておきたいな。あんな、使徒でも限られた者にしかできない真似をしておいて、いまさら違うなどとは言うなよ？　お前は、ちゃんと使徒名を持っているはずだ。それこそ、神象文字の名前など比べものにもならぬほ

ど、強い加護のある名を」

ああ、名乗れば性別が知れるから、それでか。

納得できる理由を思いつき、彼は「なるほど」とつぶやいた。

しかし、伽羅は必死な顔をして、「違います！」と叫んだ。

「なにが違う」

「わたしが娘だということと、伽羅というのが偽名だということです。使徒名を持っていることは否定しませんが、わたしはまだ、それを名乗ることができないんです」

この期に及んで、なにを言うのかと思った。

見苦しい。

自分の瞳に宿った、嘲りの色に気づいたのだろう、辛そうに顔を歪めて、それでも伽羅は言い募った。

「わたしの性は、未だ定まってません……篤すぎる水の加護が原因なのか、流れる水のようにわたしの性は移り変わりつづけています。三カ月前は、どちらかと言えば、男性に近い身体でした。だから……ふたつ用意された使徒名のどちらも、いまのわたしは名乗れないのです」

シャーニもそうでした。

荒唐無稽な話を口にする伽羅の表情は、しかし真剣そのものだった。

馬鹿馬鹿しいと、そんな話が信じられるかと、一蹴してもいいところだというのに、なぜかそれができない自分に、セイタマールは舌打ちした。

望みもしないのに、伽羅の言葉が真実であることが、わかってしまうのが腹立たしい。

（全部嘘だったら、こいつを嫌って終いにできるのに……）

嫌いになれないから、タチが悪い。

あれほど大きかった怒りは、欺かれていたのではないとわかった途端、雲散霧消してしまった。認めるしかない——自分は、この子供が気に入ってしまったのだ。

そして、だからこそ——遠ざけなければならないと、思った。

「……話はわかった。怒って悪かったな。ほら、手を出せ」

ゆっくりと近づく彼を、伽羅がきょとんとした顔で見上げてくる。

（だから、そういう無防備な顔をするなというのに……）

苦笑しながら、セイタマールは差し出された伽羅の手に、そっと『それ』を渡した。

鈍い光沢を放つ——大粒の黒真珠。

伽羅が驚きに小さな声を上げた。

「瘴気が残ってないのは確認済みだ。返しておく。形見だろう？」

そう言うと、伽羅は嬉しそうに「はい」とうなずいた。

しかし、セイタマールの次の言葉に、その笑顔はかき消えた。
「芭蕉に連れ帰ってやるといい。彼女もそれを望むだろう」
「セイ!?」
「お前のような暴れ馬にはつきあいきれない……第一、お前だってイヤだろう？　こんな不安定な力しか持たない俺なんかと組んだら、命がいくつあっても足りやしないんだから」
彼の言葉に、伽羅がぶんぶんと首を横に振った。
「そんなこと！　わたしはあなたがいい！　命を預けるのは、あなたでなければいやです！　こんな怪我ぐらい、わたしは――」
構わないとでも言うつもりか――それこそ、冗談ではなかった。
「ふざけるな！　お前がよくとも、俺はよくない！　勝手なことを言うな！」
感情のまま、怒鳴りつけた。
そうだ、冗談ではない。
目の前の存在は、これ以上はないというほどの、水と海の加護を受ける者なのだ。それはすなわち、喪月神に狙われやすいということだ。
黒珊瑚の使徒であるなど……最悪だ。
「お前はなにもわかってない。お前だけは、俺と組んでは駄目なんだ！」

いつ、ラークラーニのように、喪月神の瘴気に侵されるかもしれない伽羅。
そんな伽羅が、セイタマールと組むなど、死神をそばに置くに等しい行為だ。
（知らないから、お前はそんなことが言えるんだ……）
いっそ、諦めさせるために、打ち明けてしまおうか――守秘の誓約を破ることになってしまうが、それで伽羅が離れてくれるなら、多少の罰ぐらい、なんということもない。
そんなことを、半ば本気で考えていたときのこと。
「知ってます」
と、伽羅が告げた。
「あなたが、最高の守護者であると同時に狩人であることは。わたしがわたしでなくなった時、あなたの持つ鋭い爪が、わたしを切り裂くであろうことは。ですが、わたしはそのほうがいい……神殿に閉じこめられて、見張られながら生き腐れていくぐらいなら……」
耳を、疑った。
（なんだ……なんと言ったんだ……？）
大きすぎる衝撃に、思考が凍り付いた。
「馬……鹿を、言うな……」
口の中が、からからに乾いていた――声が、うまく出せない。

「俺の気持ちは……どうなる……」

いつ、隣にいる相手を、手にかけなければならなくなるかわからない——そんな不安と恐怖を常に抱いて、そばにいなければならない自分の心は！

信じあわなければ、ともに仕事などできはしない。

信じれば、きっと好意と絆が生じてしまう——すでに、好意は生まれているのだ。

そんなことになったら、もう自分は耐えることはできないだろう。

心は砕かれ、自分で自分を呪うだろう。

「そんな未来を、選べと言うつもりか!?」

我が儘も大概にしろ——！

窓の玻璃がビリビリと震えるほどの大喝に、しかし伽羅の瞳は揺らがなかった。

「あなたには負担でしょうが……これだけは譲れません。何度でも、あなたがうなずいてくれるまで、わたしはあなたから離れません。ただ、ひとつだけ、誓います。わたしは決して死にません……そして、決して堕ちません。あなたの狩人の爪を、露にさせることはしないと、伽羅という名、そしていずれ定まる使徒名にかけて、誓います」

誓いますから——。

「観念してください」

あまりにも自己中心的な、それでいて熱烈な口説き文句に、セイタマールは呆れ果て、返す言葉が見つからなかった――。

エピローグ

我が儘であることは、言われるまでもなくわかっている。

優しい青年――他者の血を流すことで、それ以上に己が心を傷つける。そんな彼のそばに自分がいることは、きっと酷いことなのだ。

そうとわかっていても、隣に在りたいと思う心は止まらなかった。

（いつか……）

必ずかなえるつもりの思いを、ただ胸に刻んで、伽羅は横を歩くセイタマールに目を向けた。

ふたりはいま、ともに芭蕉を目指している。

青年はまだ相棒になることに同意してくれてはいないが、身辺警護の名目で、ついてきてくれたのだ。

いや、正確に言うなら、遊羽の神官長オサラディーンに、無理矢理押しつけられた仕事らし

い。

伽羅としては嬉しい限りだ。

勿論、芭蕉に着くまでに、口説き落とすつもりでいる。

長くはないが、短くもない旅の日々――少しでも、心の距離が近づけばいいと思う。

彼が自分を、もっと信じてくれたなら、いつかそれを盾に、強情な心の痼りを、解いてあげることができると思うからだ。

（セイ……あなたの能力は、本当はちっとも不安定なんかじゃないんだよ）

いまは言えない――逆に追い詰めるだけの刃でしかない言葉。

（あなたは自分を信じてない……自分の力を信じ切れていない。あのひとを死なせてしまった慚愧の念が、あなた本来の力を縛りつけているんだ）

伽羅の肩を傷つけてしまったのも、そのせいだ。

このままでは、彼は以前のように、無傷で浄化をなすことは難しいだろう。

（だから……セイ、わたしをもっと、信じてくれ。わたしが大丈夫だと言ったら、大丈夫だと疑わないぐらい）

そうしたら、彼が躊躇うより先に、「大丈夫だから」と断言してやる。

大丈夫だと信じてくれれば、本当に血は流れない。瘴気だけを浄化して、新たな心の傷を受

けることもなくなる。
その日が来るのを、伽羅は待っている。
必ず来ると、知っている。

（まったく……なんで、こんなことになったんだか……）
こっそりと、隣を歩く伽羅を見つめながら、セイタマールはオサラディーンに対する文句を、声に出さずに並べ立てた。
（あの狸親父、二枚舌、似非聖人……）
食えない神官長からの呼び出し理由は、非常に面白くないものだった。
浮薄で亡くなったシャークネーニの遺品である黒真珠を、伽羅とともに芭蕉に届けるようにと、何食わぬ顔で、オサラディーンは命じたのだ。
即座に拒絶しようとした彼に、神官長は「それは表向きの仕事」と言い出した。
では、本題はなにかと尋ねたら、とんでもないことを命じてくれた。
『伽羅をね、芭蕉が閉じこめようとしたら、構わないから攫って来て欲しいんだ』

突拍子もない命令に、目を丸くした彼に、オサラディーンはしかし真面目な顔で、その理由を語ったのだ。

伽羅の処遇を巡り、芭蕉の神殿内部で深刻な意見の対立があることを。

伽羅の類稀な才能を愛し、その存在を肯定する一派と、篤すぎる水の加護を理由に伽羅を危険視する一派の勢力は、現在拮抗しているのだという。

伽羅を那八に送り出したのは前者であり、連れ戻し、神殿内部の仕事に従事させるべきだと主張しているのが後者らしい。

『意見はいつ、どう傾くかも知れない。もしものとき、伽羅が神殿にいたら、命を奪われかねないのだ。シイレートルは、そのことを何より心配している』

セイタマールは二の句が継げなかった。

伽羅が、あれほど必死だったのは、そのせいだったのかと思った。

『だから、伽羅と一緒に行ってきてほしい。相棒の件に関しては、お前の好きにしていいからね』

聞いた瞬間、あまりの白々しさに、拳が震えた。

そんな話を聞かされたら、自分が断れないことを知っているだろうに——本当に、あの神官長は性格が悪い。

だが、彼のおかげで覚悟が決まったのは確かな事実だ。
（業腹だが、乗せられてやるさ）
自分が隠し持つ爪を、決して露にはさせないと、誓いを立てた華奢な子供。
本当に誓い通り、この心を守ってくれるなら、伽羅のことを守ってやれる。
（さあて……いつ、口にしようか……）
その時の伽羅の顔を想像し、セイタマールは知らず微笑んだ。
伽羅が、不思議そうに首をかしげる。
「セイ？」
「なんでもない」
手を振りながら、追及をかわすと、彼は晴れ渡った空を見上げた。
（綺麗だ……）
と、心から思った。

「絶対、女にはならないと約束できるなら、組んでもいい」

道中、熱心に口説いてくる伽羅に、セイタマールがそう答えたのは――遊羽を発ってから、五日目のことだった。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

この度は『聖石の使徒　狩人の爪』をお手に取っていただき、ありがとうございます。

久しぶりの『聖石』は、本編ヒロインのお師匠の過去編です。

セイタマールが十六歳時の話ですから、『其は天秤をかざす者』に収録した『海と月の宝石』の四年後、ということになります。

トラウマを抱えこんでいるセイタマールと、相棒志願の伽羅との出会いの物語――セイタマールが最初、ちょっとやさぐれてます（笑）。「伽羅って誰よ!?」という方は、どうぞ本文にお進みください。そうでない方も、新鮮な気分でお読みいただけることは保証します。

「これ、誰？」

とは、執筆中の作者の言葉です。

ああ、年月って……（笑）。

それにしても……今回、ラブな要素はないはずの話だったのに、書いている途中、作者の頭を頻繁に過った疑問。

「……おかしい。ラブじゃないはずなのに、どうしてラブラブに感じられるのかしら？」

特に後半部でのことです。

不思議に思って、読み返したところ、どうやら原因は伽羅の台詞にある模様。

「あなたがいい」

「あなたでなければ」

「もっとわたしを信じて」

等々、熱烈な台詞が、ここにもそこにもあそこにも。

ラブ要素のある話のなかでも、これくらいの台詞を言わせられたら、わたしの作品のラブ度ももう少しは上がるだろうか……それとも、言われても相手が天然鈍感で、不発に終わるのかしら……？　あー、なんだかそうなる予感が（笑）。

しかし、コレがどうして十数年後、アアなってしまうのか――そのあたりのことは、また機会があったら書きたいと思います。

締め切りが差し迫ってくると、追い詰められた気分が影響してか、原稿に関する悪夢を見ることがあります。過去、一番恐ろしかった悪夢は、締め切りを過ぎた時点で見た、担当さんに

「前田さん、もういいんですよ……」と言われるもの（今思い出しても恐ろしい！）でしたが、今回はちょっと違う部分で恐ろしい悪夢を見ました。

夢のなかで、わたしは原稿を書いてます。そしてそれを遠くから、「ああ、夢だ」と思いながら見ているわたしがおりました。別にこれは珍しいことではありません。

問題は、夢のなかのわたしが、本気で頭を捻りながら、原稿を書いていたことです――『聖石』じゃない、全く別の原稿を！　夢だと自覚しているわたしは、必死になって夢のなかの自分を止めようとします。

その理由というのが。

「やーめーてーよー！　夢のなかでまで糖分消費しないでー！　ただでさえブドウ糖チョコレートが手放せない状況なのに、夢のせいで低血糖脳貧血なんて起こしたくないー！」

というものでした。

思い出すと、笑うしかない夢ですが、見ている時は本気で叫んでました。

しかも、これが単なる笑える夢でなく悪夢なのは、この翌朝、危惧したとおり、目覚めるとすぐ、低血糖脳貧血を起こして、しばらく立ち上がれなかったというオチまでついたからです。朝食より先にブドウ糖チョコレートを食べて始まる一日――とてもイヤーな気分でした。

誤解を招くといけないので、断っておきますが、わたしはブドウ糖チョコレート大好きで

す。単に悪夢との連動がイヤだっただけです。

今回も挿絵の山本鳥尾（やまもととりお）さまや関係者の方々に、大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

次は、『空の呪縛（くうのじゅばく）』の予定です。フィオルシェーナとファナルシーズのその後です。

それでは、また次の本でお会いできることを祈って――。

平成十九年　秋

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10

集英社コバルト編集部　気付

前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
狩人の爪

COBALT-SERIES

2007年10月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　礒田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2007　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601077-1 C0193

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

聖石の使徒

其は力を放つ者

聖石の使徒

其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

揺籃の瞳

聖石の使徒

蒼の組木箱





〈好評発売中〉 コバルト文庫

身も心も灼きつくした罪深き恋。
だから、二度と誰も愛さない――。

空(くう)の呪縛

前田珠子
イラスト／明咲トウル



『針の森』の屋敷にたったひとりで暮らしている美しく聡明な女柱神。数多くある恋の誘いを頑なに断り続ける理由。それは、過去の悲しい過ちを繰り返さないためだった――。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

天を支える者

天を支える者2

天を支える者3

天を支える者4

天を支える者 古懇唄（いにしえこいうた）

天を支える者 古懇唄2（いにしえこいうた）

天を支える者 古懇唄3（いにしえこいうた）

天を支える者 古懇唄4（いにしえこいうた）

天を支える者 古懇唄5（いにしえこいうた）

天を支える者 罠は、蜜の味



〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子

〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

鬱金の暁闇1～3

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

ここに、姉妹誕生――！

マリア様がみてる
薔薇の花かんむり

今野緒雪
イラスト／ひびき玲音



祥子立会いのもと、ロザリオの授受をした祐巳と瞳子。山百合会のみんなに姉妹になったことを報告するが、祥子の姿はなくて…？

――〈マリア様がみてる〉シリーズ・好評既刊――

マリア様がみてる
クリスクロス
あなたを探しに
フレーム オブ マインド 他26冊好評発売中

〈好評発売中〉 コバルト文庫

混戦の王位争いに"魔女"が介入!?

聖獣王の花嫁（クロスティア）

黒衣の王女

高遠砂夜
イラスト／起家一子



王位継承の資格を得た三人の王子のうち、誰が聖獣王になれるのか。第二王子の花嫁・リージュは実の妹と争う立場になってしまい…!?

〈聖獣王の花嫁〉シリーズ・好評既刊

聖獣王の花嫁（クロスティア）の花嫁
聖獣王の花嫁（クロスティア） 剣を継ぐ姫
聖獣王の花嫁（クロスティア） アルティナスの迷宮
聖獣王の花嫁（クロスティア） 破滅を告げる使者

〈好評発売中〉 コバルト文庫

叶えたい、想いがありますか？

ヴィクトリアン・ローズ・テーラー

恋のドレスと大いなる賭け

青木祐子
イラスト／あき



シャーロックと想いが通じた仕立屋クリスは身分違いの恋に思い惑う。そんな中『薔薇色（ローズカラーズ）』の新しいお客様の恋の相手を知って…？

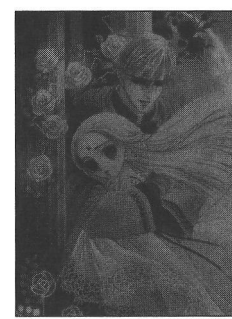
――〈ヴィクトリアン・ローズ・テーラー〉シリーズ・好評既刊――
恋のドレスとつぼみの淑女
恋のドレスは開幕のベルを鳴らして
恋のドレスと薔薇のデビュタント
カントリー・ハウスは恋のドレスで
恋のドレスは明日への切符
恋のドレスと硝子のドールハウス
恋のドレスと運命の輪
あなたに眠る花の香

〈好評発売中〉 コバルト文庫

必ず、救い出すから…。

銀朱の花
月の庭Ⅱ

金蓮花
イラスト／藤井迦耶



マコードの将来を想い姿を消した巫女姫タチアナ。捜索の末再会したタチアナは聖痕ゆえに囚われの身となっていた。二人の運命は!?

〈銀朱の花〉シリーズ・好評既刊

銀朱の花
銀朱の花Ⅰ 空の青 森の緑
秘密の約束
暁の約束
楽園の歌
祝福の歌
夢が訪れる
深い森の城
丘の上の城
夢の誓い
とこしえの薔薇 銀朱の花～ブノス異聞～
螢の庭
月の庭

〈好評発売中〉 コバルト文庫

読者大賞受賞
19歳の新鋭
鮮烈デビュー！

若き日の武田信玄と人質の巫女姫（みこひめ）。
胸を焼き焦がすほどの乱世の恋！

諏訪（すわ）に落ちる夕陽

ながと帰葉
イラスト／縹（はなだ）りん子



時は戦国。神の力を宿すと言われる諏訪一族の巫女姫・夕は戦況の中、人質として武田晴信の側室となった。一族の仇である憎き晴信を亡き者にしようと暗殺を企てたが…!?

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086010771

ISBN978-4-08-601077-1

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円＋税



コバルト文庫